

2022 年 2 月 21 日

2021 年度聖路加国際大学大学院
看護学研究科修士論文

回復期脳血管疾患患者が受けたドッグセラピーに対する
看護師の認識に関する探索的研究

An Exploratory Study of Nurses' Perceptions of
Dog Therapy Received by Patients with
Recovering Cerebrovascular Disease

学 籍 番 号 20MN004
氏 名 井上智栄子

【目的】 ドッグセラピーを受けた回復期脳血管疾患患者を、看護師がどのように受け止め、看護への影響をどのように認識しているかを探索的に明らかにする。

【方法】 男女8名を対象に半構成的インタビューを実施し、M-GTAを用い分析した。分析テーマは「ドッグセラピーを受けた患者に関する看護師の認識プロセスの研究～回復期脳血管疾患患者に焦点を当てて～」とし、分析焦点者は「回復期脳血管疾患患者がドッグセラピーを受ける場面にいた看護師」とした。聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承諾を得た(承認番号:21A-025)。

【結果】 4中心のカテゴリー、10カテゴリー、14サブカテゴリー、48概念が生成された。このプロセスは、回復期脳血管疾患患者(以下 患者)が失語症や麻痺などの後遺症により【リハビリテーションに消極的】であり、看護師は患者が回復できるよう積極的に働きかけるが【患者との関係が行き詰まる】ため、現状打破の糸口として【患者のドッグセラピー適合の可否を評価】をした上で【ドッグセラピーを実施】することから始まる。患者はセラピードッグと触れ合うことで【まるで別人】のように、こころ解け、意思が芽生え、笑顔ほころぶ様子を見せ、看護師は患者と【もう一度向き合ってみる】と思えるようになる。看護師はドッグセラピーを媒介役に患者と関わることで、患者との【関係が軌道に乗り出す】。そのことで看護師は患者に思いを馳せ、【病床前の患者の姿を思い描く】ことや、患者目線でセラピードッグの存在意義を捉え、【患者にとってはかけがえのない存在】であることに気づく。これら気づきにより、患者に貼っていたレッテルが剥がれ【患者理解ががらりと変わる】。患者理解が大きく変化することで看護ケアが発展し、終局的には【患者が病気と共に生きていくことができる礎となる】までに回復する。また看護師は【ケアに対する達成感を抱く】ようになり、看護師と患者は互いに満足のいく関係に変化し、看護師は【自己の看護を振り返る】ようになる。【患者に対する理解ががらりと変わる】【看護ケアに対する達成感を抱く】【自己の看護を振り返る】の3つの認識が相互に影響し合い、【その人がその人らしく】生きていけるよう信念を抱くようになるプロセスであった。

【結論】 ドッグセラピーは看護師の内省を促す機会となり、患者を尊重したケアを実施するための一助になる。またドッグセラピーを受ける患者に限られるが、ドッグセラピーは看護師と患者との関係構築の媒介役となることが示唆された。加えて、プロセスの終着点である【その人がその人らしく】までには同様の認識プロセスを経ていたが、看護師全員に認識の変化は起こらず、【まるで別人】のように変化する患者に気づくことがこの認識プロセスにおいて、最も重要となる転換期であることが明らかとなった。

内容

第 1 章	序論	1
I.	研究の背景	1
II.	研究目的	2
III.	研究の意義	2
IV.	用語の定義	2
第 2 章	文献検討	4
I.	ドッグセラピーの歴史的背景	4
II.	ドッグセラピーに関連する用語について	6
III.	脳血管疾患患者に対するドッグセラピーの効果	9
IV.	医療施設で提供されるドッグセラピーの副次的効果	11
V.	臨床看護師の患者理解に影響を与える要素	13
VI.	文献検討のまとめ	15
第 3 章	研究の方法と対象	17
I.	研究デザイン	17
II.	研究対象者	17
III.	対象者数	17
IV.	対象者のリクルート方法	17
V.	データ収集期間	18
VI.	データ収集方法	18
VII.	データ収集場所	18
VIII.	インタビュー項目の構成内容（資料 6 参照）	19
IX.	データ収集手順	19
X.	データ分析手法、手順	20
XI.	データの真実性及び分析の妥当性の確保	21
XII.	倫理的配慮	21
1.	研究対象者への配慮	21
2.	研究に関する倫理的配慮	23

第4章 結果	25
I. 対象者の概要(表1)	25
II. 分析結果	25
1. 抽出した概念、サブカテゴリー、カテゴリー	25
2. 結果図の説明(図1)	30
3. ストーリーライン(図1)	30
4. プロセスを構成する4中心的カテゴリー、3サブカテゴリーおよび10概念	32
5. プロセスを構成する10カテゴリー、11サブカテゴリーおよび38概念	41
6. カテゴリーの関連について	67
第5章 考察	70
第6章 結論	77
謝辞	78

第1章 序論

I. 研究の背景

我が国の平成 30 年度の死因別順位は、脳血管疾患が 7.9%と 4 位を占める(厚生労働省,2018)。特に脳卒中は麻痺や障害といった形で身体機能に影響を及ぼし、65 歳以上の要介護者の介護が必要となった原因として 15.1%の 3 位を占める(内閣府,2018)。脳卒中発症後の回復期ではリハビリテーションを強化する必要があるが、その疾患特性より脳卒中後うつやアパシーを引き起こし社会・在宅復帰に影響を及ぼす(Loubinoux et al.,2012、高橋真紀,2014)。そこで回復期では様々な方法が考案されているが、補完代替療法(Complementary and Alternative Medicine 以下 CAM)がその一つである。CAM は現代医学だけではカバーしきれない不定愁訴に対応し、科学的、統計学的なアプローチによる対象者への対応の限界を補完する(櫻井,前田,2015)。アロマセラピーや音楽療法は我が国でも看護やリハビリテーションに取り入れられ研究も進められているが、アニマルセラピーは導入や研究が十分ではない。

医療・療養施設におけるアニマルセラピーは、イヌと人間の関係性の長さや知識の高さよりイヌが用いられることが多い。そのため本研究ではイヌを用いたアニマルセラピーについて論じる。また人と動物との相互作用に基づく健康の維持・増進を示す用語は混在し使用されていることや、動物との触れ合いを目的とした動物介在活動(Animal Assisted Activity 以下 AAA)や動物を用い治療を目的とした動物介在療法(Animal Assisted Therapy)などの定義を厳密に順守した実践は難しいことより、現在ではそれら包括した用語である動物介在介入(Animal Assisted Intervention 以下 AAI)が使用されつつある。よって本研究ではイヌを用いたアニマルセラピーを、AAI におけるドッグセラピープログラム(以下 ドッグセラピー)と用語を統一する。ドッグセラピーの効果には、心理的側面では自己認識や情緒面の改善、身体的側面では血圧や心電図などの正常化や麻痺などの改善、社会的側面では他者との会話の増加や対人関係の改善など多岐に渡る(岩本,福井,2001,第 2 章)。またセラピードッグとの関わり方は触れ合い以外にも、対象者の筋力、可動域、感覚刺激、言語能力等を向上するため、セラピードッグと歩く・走る、ブラッシングする、口頭で指示を出す(Markovich,2011)など欧米を模範に発展している。

筆者は、これまでドッグセラピーを受ける患者を看護してきた臨床看護師の話から、セラピードッグの存在により、「これまで患者が表現することのなかった表情や態度をみせ、

それらを通じて患者や患者家族との関わりが変化した」や「新たな患者の一面を知り得、患者の可能性を見出せた」という発言が得られた。ドッグセラピーの機会は、看護師の看護へのモチベーションに影響を及ぼすと考ええる。また、これまでとは異なり患者のペースで会話できるよう意識的に返答の間を設けたり、患者の状況をより理解しようと試みたりする可能性がある。加えて、患者の反応を待つ姿勢により、観察の視点が変化したり、看護の中で患者の身体機能が向上する関わりを試みたり、さらにはそれらの変化を患者家族に共有する機会が増えるのではないだろうか考える。以上より、セラピードッグが与える患者への影響は、患者本人だけではなくその周囲にいる看護師や患者家族にも波及することが考えられる。そこで本研究は、回復期脳血管疾患患者がドッグセラピーを受ける場面を見た看護師に焦点を当て、その看護師が回復期脳血管疾患患者に対するドッグセラピーをどのように認識しているのかを探索的に明らかにする。

II. 研究目的

ドッグセラピーを受けた回復期脳血管疾患患者を、看護師がどのように受け止め、どのように認識しているかを探索的に明らかにし、ドッグセラピーの看護師への影響、看護への影響を考察する。

III. 研究の意義

本研究により、回復期脳血管疾患患者を対象にしたドッグセラピーの状況とそれに関係した看護師のドッグセラピーへの認識を明らかにすることができる。これは我が国において、未開拓分野である医療施設におけるドッグセラピー研究の先駆けとなり、今後、医療施設でのドッグセラピーの効果を見出す研究の基盤となる。またドッグセラピーの患者への影響は、看護師に気づきの契機を与え、通常の看護場面での患者を知る視点とは、異なる視点がもてる可能性がある。そのため、本研究の目的を明らかにすることは、脳血管疾患患者の回復を促進し、患者を尊重した看護を行う上で新たな支援方法を見出す一助になると考えられる。

IV. 用語の定義

1. Animal Assisted Intervention(AAI)におけるドッグセラピープログラム

患者の治療上の利益を得ることを目的として、健康、教育、ヒューマンサービス等

に意図的にセラピードッグを含めるか、または取り入れる目標指向の構造化された介入を指す。その介入は専門職者が患者に必要であると判断した時や患者の希望時に行われ、その方法は専門職者のアセスメントに基づき定められる。その方法は、患者がセラピードッグを撫でたり抱っこしたりする触れ合いや、セラピードッグと歩く・走る、ブラッシングする、口頭で指示を出すなど様々ある。

2. セラピードッグ

AAI におけるドッグセラピープログラムにて、患者への介入に際し十分に訓練され対象施設で定められた基準に到達しているイヌを指す。またイヌの大きさや種類に決まりはなく、介入する患者の目的に適したイヌが提供される。

第2章 文献検討

本章では、ドッグセラピーに関する研究の示唆を得るため、国内外における研究論文や書籍等の文献について検討した。文献検討の項目は以下である。

- I. ドッグセラピーの歴史的背景
- II. ドッグセラピーに関連する用語について
- III. 脳血管疾患患者に対するドッグセラピーの効果
- IV. 医療施設で提供されるドッグセラピーの副次的効果
- V. 臨床看護師の患者理解に影響を与える要素
- VI. 文献検討のまとめ

I. ドッグセラピーの歴史的背景

近年我が国では、「人と動物との相互作用に基づく健康の維持・増進」を図るための支援方法として、アニマルセラピーがある。アニマルセラピーは、補完代替療法の一つであり、ウマやイヌ、トリ、イルカなど様々な動物が用いられる。医療・療養施設においては、患者や入所者を対象に、イヌによるアニマルセラピーの実施が多いとされている。アニマルセラピーで使用される動物は定められた基準に到達することが求められるが(岩本, 福井, 2001, 第3章; Fine, H., 2005/2007, 第1章)、なかでもイヌは、人間との関係性の長さや知力の高さにより、訓練が容易であること(Bert et al., 2016)から、医療や療養の場で選択されることが多かった(Sockalingam et al., 2008)。

人とイヌとの相互作用の歴史は古く、人は古代からイヌを家畜や防衛の道具、あるいはペットとして利用してきた(岩本, 福井, 2001, 第1章; 石田, 2008)。医療現場で最も古いアニマルセラピーの導入は、18世紀の英国の静養所に遡り、動物との交わりによる社会化への影響を期待し、精神病の治療に応用されたのが始まりであった(岩本, 福井, 第1章, 2001; Fine, H., 2005/2007, 第1章)。19世紀には、英国の精神療養所にて日常的にアニマルセラピーがなされるようになり(Fine, H., 2005/2007, 第1章)、フロレンス・ナイチンゲールは看護覚え書きの中で、「動物、特に犬の存在は患者の回復を助ける場合がある」と記し、看護の視点からも犬の患者効果を表すようになった(Nightingale, 1983/2000, p.174)。

このように 19 世紀は、医療・療養の場にてドッグセラピーが盛んに実施されていたものの、医学の進歩に伴い、徐々にアニマルセラピーは医療・療養の場から提供の機会が無くなっていった(Fine.H,2005/2007,第 1 章)。しかし 20 世紀に入り、臨床心理学者のレビンソンの発表論文(1960 年代)がきっかけとなり、再び注目され始めることとなった(岩本, 福井,2001 第 1 章; Fine.H,2005/2007,第 1 章;Sokalingam et al., 2008)。1977 年には、精神科医のマイケル博士らは、人と動物の相互作用による効果はより深い意味があり、医学界の注目を集めるためには科学的な研究が必要であると考え、人と動物の相互作用に関する実践、普及、研究活動を実践すべくデルタ協会を設立した(*The Pet Partners Story*)。デルタ協会は研究基盤をもとに、包括的で標準化されたトレーニング方法をボランティアや医療従事者を対象に提供した。また、1992 年には世界的規模の学術的な組織である人と動物の相互作用国際学会 (International Association of Human-Animal Interaction Organizations : IAHAIO) がデルタ協会内に設立された。このような背景により、欧米では現在、高齢者施設や小児科病院、ホスピス、救命救急センターを含む総合病院などでドッグセラピーが実施されていた(Bert et al., 2016; Chang et al., 2021; Ginex et al., 2018; Gundersen & Johannessen, 2018; Hawkins et al., 2019; Kline et al., 2020; Pruskowski et al., 2020)。その対象者は、認知症患者や急性期にあり重症度の高い患者、リハビリテーション期にある患者、慢性期の患者、精神疾患の患者、ターミナル期にある患者など多岐に渡る。加えて、その研究は症例研究からランダム化比較試験まで幅広く行われていた。

一方、我が国においても、近年、欧米を模範にドッグセラピーが取り入れられるようになったが、我が国では人と動物とは棲み分けるものという動物に対する価値観や(石田, 2008)、日本人特有の清潔観念により、病院や療養の場におけるドッグセラピーの実施は遅々として進まなかった。しかし、2010 年、静岡県立子ども病院のドッグセラピーの導入をきっかけに、我が国でも医療・療養施設の場で実施されるようになった。現在の活動場所は、高齢者施設や小児科病院、ホスピスなどであり、その対象者は、認知症患者や精神疾患の患者、ターミナル期にある患者などと幅広く行われている。しかし、それらの実践内容や有効性を論じた研究は数少ない状況であり、ドッグセラピーの活動自体もボランティア団体や病院、施設等が各々活動しており、全国組織としての活動ではなく、活動組織体制の基盤は十分ではなかった(Fujisawa et al., 2019; 伊藤他, 2015; 佐藤他, 2003; 横山, 1996.; 熊坂他, 2008; 熊坂他, 2010; 鈴木,金森, 2004)。また今後、ドッグセラピーに関する効果検証が課題ではあるが、それ以前にドッグセラピーを全国的に実施できる組織体制づ

くりが求められている現状があった。欧米と比較すると我が国におけるドッグセラピーの歴史は未だ浅く、発展段階の分野であった。

II. ドッグセラピーに関連する用語について

アニマルセラピーは、目的に応じて支援方法および用語が異なり、主にそれらは動物介在療法(Animal Assisted Therapy 以下 AAT)や動物介在介入(Animal Assisted Intervention)と表現されていた。しかし AAT、AAI という用語が創出されるまでは、ペットセラピーやアニマルセラピー、アニマルファシリテッドセラピーなどといった用語が、混在して使用されてきた背景があり(岩本,福井,2001,第3章; Fine.H,2001/2007,第2章)、現在でもそれら用語の混在は認められている。また、発達段階の分野であることより、わが国では、人と動物との相互作用に基づく健康の維持・増進を図るための支援方法として、「アニマルセラピー」の用語の普及率が最も高く(中村延江,2001)、目的に応じて分けられていた用語を総称している傾向にあった。そこでこの節では、本研究における用語の定義を定めることを目的に文献検討を行った。

国内文献は、データベースとして医学中央雑誌(Ver.5)を使用した。検索対象期間は、検索可能な最長期間に設定し、検索式は、「アニマルセラピー」and シソーラス用語である「動物介在療法」とした。また、論文の種類を「原著論文」、「会議録除く」に絞り込んで検索した結果、24 件を抽出した。この 24 件の文献の中から、データ収集・分析手法が十分に記載され、その信頼性、妥当性を確認することができた 7 件の研究論文を分析対象とした。また、海外文献は PubMed、CINAHAL のデータベースを使用し、検索年は 2000 年から 2020 年までの 20 年間とした。検索論文の限定として検索対象を「原著論文」とし、検索語は「Animal Assisted Therapy」「dogs」「nurses」「nursing」「nursing care」「Nurse's Role」をメッシュ用語にし、タイトルには「animal-assisted activities」「animal-assisted therapy」「service animal program」「animal-assisted intervention」「dog」「dogs」「canine*」「nurse*」「nursing」とした。検索式は看護を除外したものと含むものの 2 通りを用いそれぞれ検索を行った。これら検索より条件にあてはまる論文 26 件を本研究の分析対象とした。さらに、ハンドリサーチとして、「アニマルセラピー」や「動物介在療法」に関する 7 冊の書籍を対象とした。

1996 年デルタ協会は、人と動物との相互作用に基づく健康の維持・増進を示す用語を統一するため AAT と AAA の定義を発表した(Fine.H,2001/2007,第2章)。その後、IAHAIO

により新たに AAI、AAT、AAA、動物介在教育(Animal Assisted Education 以下 AAE)、動物介在コーチング(Animal Assisted Coaching)の6つの用語が定義付けされていた。本研究では特に、AAI、AAT、AAA、AAE が関連する用語であった。IAHAIO(2014)による定義では、AAT は健康、教育、ヒューマンサービスの専門家が指示したり提供したりする目標指向型で計画化・構造化された治療的介入であり、介入の進捗状況は測定され専門的な文書に記録される必要があった。また、正式に訓練を受けた(活動的な)専門家によって行われ、専門家の実践範囲内(免許、学位、またはそれに相当するもの)でなければならないと記されていた。また、AAA は、実施者である専門家と動物が、動機付け、教育、レクリエーションを目的として、計画的で目標を持ったインフォーマルな交流と訪問を行うものであった。AAA を行う者は訪問に参加するために、少なくとも入門的なトレーニング、準備、評価を受ける必要があった。AAA を行う者は、特定の文書化された目標に向けて、医療、教育、福祉サービスの提供者と正式に、そして直接協力することもできる(IAHAIO,2014)と定義されていた。また、AAE は教育および関連サービスの専門家によって指示および/または提供される目標指向、計画され構造化された介入であった。AAE は、資格を有する(学位を有する)一般教育および特別教育の教師によって実施されていた。通常の教育の教師によって提供される AAE の例は、責任あるペットの所有を促進する教育的な訪問であり、活動の焦点は、学力目標、プロソーシャルスキル、認知的に機能していることを確認する。その活動は生徒の進捗状況が測定され、文書化され AAE を提供する者(通常の学校の先生または以下の動物を扱う者)を含む教育専門家の監督下にある場合についての十分な知識を有していなければならない(IAHAIO,2014)と定義されていた。最後に AAI は、人間の治療上の利益を得ることを目的として、健康、教育、ヒューマンサービス(例えば、ソーシャルワーク)に意図的に動物を含めるか、または取り入れる、目標指向の構造化された介入であった。それは、関係する人と動物の知識を持つ人々を巻き込むことである。AAI は AAT、AAE、または AAA のような正式なヒューマンサービスに人間と動物のチームを組み込む。そのような介入は、学際的なアプローチを用いて開発され、実施されるべきであると記されていた(IAHAIO,2014)。

国内文献では、「動物介在療法」の用語こそ使用されているが、用語の定義を明確にしている文献はほとんどなく、論文中の実践内容も定義で定めた方法を遵守しているか定かでない(Kumasaka et al., 2012; 寿賀,荒木, 2005; 山川,丸口, 2001; 木全,嶺岸, 2013; 岡田 雅他, 2002; 内苑,西村, 2003)。AAT を用いる対象者や目的が明確でない場合もあり、AAA の

言葉と混在し使用していることが考えられる。その理由に、我が国は、Pet Partners®のよ
うに国から承認された団体はなく、各団体が各々の活動基準を設けていることより、
IAHAIO の定義で要求される基準全てを厳密に満たすことは難しいことが考えられる。

一方、海外文献では AAT に関する定義付けは殆どなされていたが、定義の引用元のば
らつきや定義が十分説明されていない状況であった。前述の団体以外に米国獣医師会や
Animal Assisted Intervention International を参考に定義付けがなされていた(Harper et al.,
2015;Uglow, 2019)。各団体の定義は表現こそ異なるが、説明内容や意味は IAHAIO の定
義と同様であった。加えて、AAT 以外の用語では、AAI (Gundersen&Johannessen, 2018;
Machová et al., 2020; Rodrigo.C et al., 2020; Rodrigo.C et al., 2019) や Therapy Dog (Kline
et al., 2019;Kline et al., 2020; Swall et al., 2019) などが使用されていた。対象論文における
AAI の定義は IAHAIO に基づいており、年次別にみると、IAHAIO の定義が発表された
2014 年以降に頻出される用語であることがわかる。AAI の用語が使用されているその背景
には、国内同様に AAT や AAA の定義を厳密に厳守することは難しさがあり
(Fine.H,2001/2007,第 2 章)、それらを包括的に捉えることができる AAI を使用してい
る。

一方で Dog Therapy に関しては定義が記載されておらず、また学術的にも定義付けはさ
れていない。しかし、使用する動物の名を用いてドッグセラピーと表現をされることもあ
り、その用語がきちんと定義付けされ、使用されているものはヒポセラピーに限られる
(Fine.H,2001/2007,第 2 章)。ドッグセラピーやキャットセラピーなどは、AAT における
ドッグセラピープログラムや、AAE におけるキャットセラピープログラムなど、その活動
の目的があってこそその表現である。そのため、Lundqvist et al(2017)は、イヌを介助動物
とする介入に限定し、AAT を DAT(Dog-Assisted Therapy)に、AAA を DAA(Dog-
Assisted Activity)に転置し言葉の用語を新たに作成している。つまり、ドッグセラピーや
キャットセラピーなどという表現は存在せず、それらは AAI や AAT におけるドッグセラ
ピープログラムという意味合いになることがわかる。最後に、セラピープログラムで用い
られる動物のことを、セラピードッグやセラピーキャットなどと表現している。

以上、人と動物との相互作用に基づく健康の維持・増進を示す学術的な用語として、動
物との触れ合いを目的とした AAA(動物介在活動)、動物を用い教育を目的とした AAE(動
物介在教育)、動物を用い治療を目的とした AAT(動物介在療法)が認められた。また、こ
れら 3 つの用語を総括した用語として、AAI(動物介在介入)を認めた。医学・看護学分野

における人と動物との相互作用に基づく健康の維持・増進を示す用語は、AAT や AAA、また AAI が該当する。加えて、AAT や AAA の定義を厳密に遵守した実践は難しいため、2014 年以降はそれらを包括した用語である AAI を定義とし使用していた。使用する動物の名を用いて〇〇セラピーと呼称する場合もあるが、それは、ヒボセラピー以外は存在せず、AAI や AAT におけるドッグセラピープログラムの意味合いとなり、そこで用いられる動物はセラピードッグやセラピーキャットと表現される現状であった。したがって、本研究では、AAA や AAT の定義を厳密に遵守した実践は難しいことから、それらを包括した用語である AAI を用い、AAI におけるドッグセラピープログラム(以下 ドッグセラピー)と用語を統一した。

III. 脳血管疾患患者に対するドッグセラピーの効果

ドッグセラピーの効果は、心理・身体・社会的側面の 3 つに分類された。心理的側面では、救急科に搬送された患者を対象にした研究では、通常のケアと比較しドッグセラピーを実施した群において、10 段階評価で示された不安や抑うつ、疼痛の値が有意に低下していた(Kline et al., 2019)。また、入院中の子どもを対象にした研究では、ドッグセラピーを実施した群では子どもの特性不安を測定する尺度 Trait Anxiety Scale for Children (STAIC) において不安感が有意に減少し、保護者からもセラピーへの高い満足度が示されていた(Hinic et al., 2019)。加えて、施設に入所中の高齢者を対象とした研究では、ドッグセラピー実施群は、高齢者用うつ尺度のスケールにおいて有意な減少が認められていた(Ambrosi et al., 2019)。

身体的側面では、手術直後の子どもを対象とした研究において、ドッグセラピー実施群に、セラピードッグとの接触後全ての対象者に脳波 β 波の活性化が認められていた(Calcaterra et al., 2015)。さらに介入群ではより疼痛緩和が示されていた。ペットとしてイヌを飼育中である ACE 阻害薬の薬物治療患者に対するストレス反応を調査した研究では、イヌを飼育している患者は、していない患者と比較し、血圧、心拍数、血漿レニン活性が低下していた(Allen, 2001)。また、心不全患者を対象にしたドッグセラピー実施群では、収縮期肺動脈と神経ホルモンレベルの低下の効果が認められていた(Cole et al., 2007)。

社会的側面では、自閉症などの発達障害をもつ入院患者や認知症高齢者を対象にした研究では、ドッグセラピー実施群はそうでない群と比較し、ポジティブな表情や、話す頻

度、ジェスチャーの使用が有意に高く、社会的コミュニケーション行動の改善効果があったとしていた(Germone et al., 2019;Wesenberg et al., 2019)。また高齢者福祉施設などにデイサービスの一環としてドッグセラピーを導入した場合の医療費削減効果を検討した研究では、通院回数の削減により約 1350 億円の医療費削減が見込まれるとしていた(鈴木,櫻本 2013)。

脳血管疾患患者へのドッグセラピーの導入は増加傾向にあった。脳卒中患者の約 30%がうつ病を発症すると言われており、うつ病発症は機能改善を遅らせ予後不良の要因であった(Eriksson et al., 2004; Tsuchiya et al., 2016; 中間他, 2017; 堀他, 2018; 岡田 真明, 2017)。特に、失語症を発症した患者の気持ちは、「話せないこと、読めないことでできないことに直面した苛立ち、悲しみ」や「繰り返されるコミュニケーション困難により生じる不安定な感情」(大久保他, 2018)などを抱く。また、失語症患者は、会話という媒体を通して自分の認知的社会的能力を表出できないため、会話の能力と機会が減少することで知覚された能力の欠如を経験していた。この能力と機会の欠如は、自己の能力を隠すことに繋がり、他者から能力の欠如と認識されることで、会話や社会活動からさらに患者を排除し、負のサイクルが生まれ失語症患者を孤立させていた(Kagan, 1995)。このように脳血管疾患による麻痺や障害といった後遺症は、うつ病発症の要因となり、患者を社会的に孤立させ、転帰の悪化に影響を及ぼしていた(Boden-Albala et al., 2005)。そういった状況に置かれている患者にとってセラピードッグとの触れ合いは、患者の感情を大きく揺さぶる存在になり得る。脳血管疾患患者への介入方法として、諸外国ではリハビリテーション期において対象者の筋力、可動域、感覚刺激、言語力の向上を目的とした内容があり、具体的にはセラピードッグと歩く、走る、ブラッシングする、口頭指示を出すなど多様化していた(Markovich, 2011)。脳卒中後の患者を対象にしたドッグセラピー効果を明らかにした研究では、理学療法のリハビリテーションにドッグセラピーを実施した群では、そうでない群と比較し、気分評価においてセラピー実施後に有意に良くなったとし、またセラピードッグの存在は他治療法を促進する効果があったことを明らかにしていた(Machová, Procházková, Říha, & Svobodová, 2019)。脳卒中後患者のセラピードッグの看護への効果を調査した研究では、ドッグセラピー実施群では看護成果分類である NOC 指標(Nursing Outcomes Classification)において「精神運動エネルギー」の「感情」、「集中力」、「関心」の項目において有意に高く、精神活動の改善を示唆していた(Fujisawa et al., 2019)。LaFrance et al (2006)は、失語症患者にセラピードッグを導入した事例研究を行っている

が、セラピードッグの存在は通常のリハビリテーションと比較し、言語および非言語的なコミュニケーションを助長したと報告していた。失語症患者にとってセラピードッグの存在は、言語機能、発話機会などの非言語的なコミュニケーション技術を改善する促進剤である場合があるとしていた。

これら研究結果は、脳血管疾患患者にとってのセラピードッグが、患者を評価せず、そのままを受け入れてくれるような存在となり、それが良い影響を及ぼしていると考えられた。これは、識字能力が低い子どもにセラピードッグが静かに寄り添うことで、意欲と読書能力の向上を認めた研究と同様の効果が得られると考えられた(Amsterlaw et al., 2009; Hall et al., 2016)。Hawkins et al (2019)は、脳卒中患者へのドッグセラピーが患者の QOL を改善するか評価するため、また、それらプログラムの実現可能性と潜在的な障壁に関連する結果評価のためのプロトコルを公表していた。失語症患者に対するドッグセラピーの効果(Sharon,2020)、小児脳損傷後の理学療法や作業療法におけるドッグセラピーの効果(Narad,2019)、脳卒中患者を対象とした AAT の効果を明らかにするためのランダム化比較試験(Kristýna,2018)が現在検証中であり、結果は未公表であった。

以上、脳血管疾患患者を対象にしたドッグセラピーは、社会的孤立やストレスを改善するための治療的補助として効果的な介入であった。セラピードッグの存在は脳血管疾患患者の悲しみや孤立感などの感情を癒し、気分改善や社会性の向上効果より、治療を促進させることが期待できた。脳血管疾患患者を対象にしたドッグセラピーの需要は増えつつあるが、その効果検証は発展途上であった。

IV. 医療施設で提供されるドッグセラピーの副次的効果

ドッグセラピーの効果は、対象となる患者だけではなく、患者と関わる医療従事者を対象にした検討も進められていた。医療従事者の中でも看護師のストレス反応に対するドッグセラピーの効果を明らかにしている研究では、セラピードッグと関わることのできる休憩時間では、他の過ごし方と比較し唾液コルチゾールの値が有意に減少し、セラピードッグの存在が看護師のストレスを低減できることを明らかにしていた(Machová, Součková, Procházková, Vaníčková & Mezian, 2019)。また、熱傷治療センターの患者と医療従事者を対象にしたドッグセラピーの印象を明らかにした研究では、スタッフの 95.7%がセラピードッグの訪問後に気分が改善し、再度セラピードッグと一緒に仕事をしたいと回答していた。さらに、セラピードッグの存在は患者だけではなく医療従事者の気分とストレスレベ

ルが即座に改善したとコメントを得ていた(Pruskowski et al., 2020)。加えて、Jensen et al (2021)は、小児科の医療従事者を対象に、燃え尽き症候群と仕事の幸福度など精神的な健康に及ぼすセラピードッグの存在の影響を明らかにしていたが、セラピードッグの存在は、個人的な達成感をより高く感じることや、よりポジティブな仕事の捉え方および辞めたいという意思の低下に関連し、さらにはよりポジティブな感情・より良い精神的健康の認識・より低い抑うつ度に関連していることを明らかにしていた。

また、これら患者を含めた効果や医療者自身への効果に加え、看護師がドッグセラピーを実施するための動機付けを明らかにしている研究を認めた。Gundersen & Johannessen(2018) は特別養護老人ホームの入所者を対象としたドッグセラピーを取り入れた動機を、看護師にインタビュー調査を行い明らかにしていた。入所者に与えるプラスの影響がドッグセラピーを受け入れる動機となったことを明らかにしていたが、そのインタビューの中で、それら影響は看護師自身へも何らかの影響があると述べられていた。看護師は「セラピードッグにより入所者が幸せや良い雰囲気になっているのを見ることは私自身にも喜びをもたらす。またそれら良い雰囲気が患者に与える影響のように、私たち自身にも何らかの影響を与える」と述べていた。また、看護師はセラピードッグによりこれまでのケアでは経験したことがない、新たな患者の側面をみる機会を得ていた。それまで関りがなかった入所者同士が会話をし始めたり、認知症の患者がセラピードッグの前に立つるとかつての飼い犬の話を休みなく話続けたり、また他の認知症患者は一度関りを持っただけのセラピードッグの名前を記憶していた。そのような変化に対し看護師は、「良い瞬間を作ることがいかに大切か、そして、たとえそれが長く続くものではなくても、長く記憶に残るものではなくても、その瞬間にはここにあるのだということを、私たちに思い出させてくれます。そして、普段はあまり話さない人や、認知機能が著しく低下している人が、突然、病気になる前の自分にほとんど戻っているのを見ることは、明らかに楽しい」と述べていた。

以上より、ドッグセラピーの効果は患者だけではなく、それに関わる医療従事者へも何らかの良い影響があった。特に看護師へのセラピードッグの効果としてストレスレベルの低下が示唆されていた。また、セラピードッグによってもたらされる患者の変化は、看護師にとって、看護師が捉えていた患者の能力や可能性を超えた新たな患者の側面を知る機会となった。

V. 臨床看護師の患者理解に影響を与える要素

筆者は、これまでドッグセラピーを受ける患者を看護してきた臨床看護師の話から、セラピードッグの存在により、「これまで患者が表現することのなかった表情や態度をみせ、それらを通じて患者や患者家族との関わりが変化した」や「新たな患者の一面を知り得、患者の可能性を見出せた」という発言が得られた。これらの機会は看護師の看護へのモチベーションに影響を及ぼすと考えられた。例えば、これまでとは異なり患者のペースで会話できるよう意識的に返答の間を設けたり、患者の状況をより理解しようと試みたりする可能性があった。また、患者の反応を待つ姿勢により、観察の視点が変化したり、看護の中で患者の身体機能が向上する関わりを試みたり、さらにはそれらの変化を患者家族と共有する機会が増えるのではないだろうかと考えた。

セラピードッグが与える影響は、患者本人だけではなく、その周囲にいる看護師、その看護師の患者の視方や看護ケアにも何らかの影響をもたらしていると考えた。特に看護師への影響では、IV. 医療施設で提供されるドッグセラピーの副次的効果の文献検討で先述した先行研究同様に、セラピードッグによりもたらされる患者の変化は時に看護師にとって、看護師が考えていた患者の能力や可能性を超えた新たな患者の側面を知る機会となる。この機会は、看護師の患者理解や看護実践および看護へのモチベーションなどに影響を及ぼすのではないかと考えられた。例えば、これまでの患者とのコミュニケーションの取り方とは異なり、看護師は患者のペースで会話できるよう意識的に返答の間を設けることや、患者の状況をより理解しようと試みる可能性もある。また、相手の反応を待つ姿勢により、日々の患者への観察ポイントの視点が変化したり、少しでも看護の中で発語できるような関わりを促進しようと試みたりと、セラピードッグの存在により患者理解が促進され、延いては看護師の看護観に影響を及ぼす可能性が考えられた。そのためこの節では、臨床看護師の患者理解に影響を与える要素について文献検討を行った。

看護実践において患者理解は必要不可欠であり、患者を理解することは、看護の目的達成のための第一要件とされ、看護実践においては自明のことであった(古地, 2003)。看護学生を対象に患者理解という経験を明らかにした研究では、理解という出来事を自覚する契機は「理解の阻害」という経験から始まる。またその阻害は「他なるもの」の問いかけによるものだけではなく、看護学生自身の「他なるもの」からの問いかけを契機に自分の理解を省みること、つまり「他なるもの」として学生と患者が一体になり思慮することで深まるものであると明らかにされていた(前川, 2012)。また、看護師が患者の立場に立つ

て考える思考方法を明らかにした研究では、「自分の視点からの想像」と「患者の視点からの想像」があり、これら思考方法は場面や状況により使い分けられる可能性が示唆されていた(林, 2011)。大橋他(2019)は、看護学生が臨床で患者理解を進めるプロセスの中心には「葛藤と振り返り」があり、実践においてそれらを繰り返す行うことで「患者を深く理解したケア」につながると示唆していた。加えて古地(2003)は、看護師が常に自己の「先入見」を自覚し、吟味することにより、看護専門職の真の価値を問われる「患者を理解する」ことに導くことができ、自己の見解を一時中断する備えを有することがより効果的な看護行為を導くと述べていた。

患者理解には、まずは看護職者が「理解の阻害」や「葛藤」に看護師自身が気づくことが重要であり、気づきなくしては、患者理解はもたせられないと考えられた。「気づき」を脳神経学的視点より考察している山鳥(2018)によると、「気づく」が自分の現在のこころの変化を検出するこころの働きであり、「気づく」ことは、自分が立ち上げる感情に自分で気づき、自分が立ち上げる心象に自分で気づくことであると述べていた。すなわち、まずはこころの動きである「気づき」が起こらない限り、当事者のこころにはそれら対象とするものが存在しない。これら一連の思考過程は、クリスティーン・A・タナー氏の臨床判断モデルからいえる。臨床判断モデルとは臨床の場における看護師の思考を表現したもの(松谷, 2016)であるが、その過程は「気づき」「解釈」「反応」「省察」の4つのフェーズからなり(Tanner, 2006/ 2016; 三浦, 2016; 松谷, 2016)、「解釈」や「省察」を通して看護実践は発展していた。そのため、「気づき」なくしては思考の深まりや患者理解には及ばないことより、「気づき」が最も重要であることがいえた。諏訪部(2007)は、対象の気づきを促進するには、普段の看護師と対象者の関係性における見方とは異なる視点が持てるような機会が大切であり、さらにその時にいかに深く内省できるかが重要であると述べていた。またその気づきや内省を促す方法としてリフレクションが存在した。近藤(2020)は、リフレクションとは「学習者が意図的に行う内的な探究であり、自分自身の実践を振り返り、自分の反応(行為)、信念、論理、前提の吟味を行い、その経験に新たな意味づけ・理解を統合するプロセス」と定義していた。リフレクションの効果としては、看護の可能性に気づき、新たな支援方法や解決策を見出したり積極的な看護実践につなげたり、患者との関係性を強化・構築することができた(上田, 宮崎, 2010)。加えて、看護師を育成するための継続教育の方法についての示唆を得る研究では、看護師は知らず知らずに自分の枠で対象者をみており、看護に必要とされる情報を無意識に取捨選択

する傾向にあったが、普段とは異なる関わりやリフレクションにより新たな視点で対象を捉える必要性に気づき、意識の変化がもたらされると述べていた(高橋 恵子, 2015)。

以上より、患者理解は看護を行う上で必要不可欠であるが、看護師は経験を経ると知らず知らずに自分の枠で対象者を捉えることがあった。また、患者理解には「理解の阻害」や「葛藤」に「気づく」ことが重要であるが、まずは看護師自身がその気づきに「気づく」必要があった。気づきは普段の看護師と対象者の関係性における視方とは異なる視点が持てるような機会により促進され、その方法としてリフレクションが存在した。リフレクションは看護師が内省し、看護の可能性に気づき、新たな支援方法や解決策を見出したり積極的な看護実践につなげたり、患者との関係性を強化・構築する効果があった。セラピードッグによってもたらされる患者の変化は、看護師にとって看護師が考えていた患者の能力や可能性を超えた新たな患者の側面を知る機会となるが、この機会は、看護師に気づきの契機を与え、普段の看護師と対象者の関係性における見方とは異なる視点がもてるようになった。そのきっかけは時に看護師のリフレクションを促し、看護師は普段とは異なる患者との関わりや新たな視点で患者を捉える必要性に気づき、看護師の患者理解に影響を及ぼすことが考えられた。

VI. 文献検討のまとめ

ドッグセラピーに関する研究の示唆を得るため、国内外における研究論文や書籍等の文献検討を行った。日本でも「人と動物との相互作用に基づく健康の維持・増進」を図る支援方法として、ドッグセラピーの導入が進められていた。しかし、欧米と比較すると我が国の歴史は未だ浅く、発展段階の分野であった。アニマルセラピーは、人と動物との相互作用に基づく健康の維持・増進を図るための支援方法とされているが、動物との触れ合いを目的とした動物介在活動(Animal Assisted Activity)、動物を用い治療を目的とした動物介在療法(Animal Assisted Therapy)といった厳密な定義によってアニマルセラピーの内容を説明することもあった。しかし実践現場では、定義を厳密に遵守した実践は困難であることから、包括した用語である動物介在介入(Animal Assisted Intervention)を使用していた。加えて、医療介護福祉分野でのアニマルセラピーの動物は、厳格な基準に到達することが求められ、人間との関係性や知識の高さを理由に到達基準を満たす「イヌ」が用いられることが多く、そのアニマルセラピーはドッグセラピープログラムと呼ばれることが多かった。そこで本研究ではAAIにおけるドッグセラピープログラム(以下 ドッグセラピー)

と用語を統一した。

ドッグセラピーの効果には、心理面には不安や抑うつ軽減、身体面では血圧の低下や痛みの軽減、さらに社会面では社会性の向上や医療費削減効果などがあった。また、脳血管疾患患者を対象にした効果は、悲しみや孤立感などの感情を癒し、気分改善や社会性を向上していた。これらの効果は、脳血管疾患患者のその他の治療の促進が期待でき、治療的補助として意義ある介入であった。加えて、ドッグセラピーの効果は、患者だけではなく医療従事者のストレスレベルを低下することが明らかにされており、また新たな患者の側面を知る機会を与えるなど良い影響があった。

患者理解は看護を行う上で必要不可欠であるが、自分の枠で対象者を捉えがちになった看護師が患者理解を深めるためには、「理解の阻害」や「葛藤」に「気づく」ことが重要であった。気づきは、普段と異なる視点を持つ機会となり、気づきによって看護師のリフレクションが促され、看護師の患者理解やその後の看護実践に影響を及ぼすとされていた。したがって、患者に対するドッグセラピーを経験した看護師の、患者理解の変化を明らかにすることは、看護師が患者を尊重した看護実践を行う上で新たな支援方法を見出す一助になると考えられた。

以上から、看護師が患者に対するドッグセラピーを経験することで、気づきなどにより患者理解は変化するのか、どのように変化するのかを明らかにする価値が十分にあり、そのことは、患者を尊重した看護実践を行う要素を導く一助になると考えられ、重要な研究課題であると捉えた。

第3章 研究の方法と対象

I. 研究デザイン

半構成的インタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach：以下 M-GTA)を用いた探索的研究

II. 研究対象者

回復期脳血管疾患患者を対象にしたドッグセラピーの場面を見たことがある看護師

III. 対象者数

看護師 5 名以上

設定根拠：探索的に継続的比較分析を実施し、概念生成からカテゴリー生成までを行うために要する人数であり、かつデータ収集期間中に実施可能な人数と判断したため。

IV. 対象者のリクルート方法

回復期脳血管疾患患者を対象としたドッグセラピーを実施している医療施設を選定し、看護部長より推薦を受けた者(以下 候補者)や、研究者が募集し応募してきた者(以下 応募者)を対象とし同意を得た。

1. 選定したリクルート施設の管理者に「研究協力依頼書(資料 1)」を郵送し、候補者の選定を依頼した。資料 1 には、研究者の氏名、所属、研究の目的、意義、方法、対象者、倫理的配慮を記載した。
2. 研究協力の同意の返答はメールとし、同意が得られた場合は対象施設の管理者と WEB で面談を行い、口頭と書面(資料 1)にて研究内容の説明と同意を得た。
3. 管理者から候補者に「研究参加のお願い(資料 2)」の文書を渡すよう依頼した。資料 2 には、協力が得られる場合は研究者へ連絡する旨と、研究者のメールアドレスおよび携帯電話番号を記載した。候補者とは別の応募者が研究参加できるよう「研究対象者募集ポスター(資料 7)」を看護師の休憩室や更衣室に貼付頂くよう看護部長に依頼した。
4. 候補者と研究者が連絡を取れた際は、インタビュー日時を調整した。インタビュー当

日までに「研究参加のお願い(資料2)」、「研究参加の同意書(資料3)」、「研究参加の同意撤回書(資料4)」、「フェイスシート(資料5)」、切手を貼付した返信用封筒(以下封筒)各2部を郵送し、事前に資料全部を読み、資料5は記入し返送してもらった。

5. 研究者は候補者とインタビュー前にWEBで対面し、資料2、3、4を用いて研究目的、内容および倫理的配慮、同意撤回がいつでも可能であることを口頭と書面で再度説明し同意を得た。

V. データ収集期間

当法人 研究倫理審査委員会承認後 ～ 西暦 2021 年 11 月 30 日

設定根拠：当法人倫理審査委員会にて承認を得た後データ収集を開始した。対象者1人につきデータ収集から概念生成までに1か月程度時間を要すると仮定し、5人目終了までに5か月要すると予測したためである。

VI. データ収集方法

1. 「インタビューガイド(資料6)」を用いた半構成的インタビューとした。対象者がドッグセラピーを見た経験を想起できるよう、インタビュー当日までに「フェイスシート(資料5)」の記入を依頼した。
2. 対象者の許可を得て、インタビュー内容は全てICレコードやWEBの録画機能にて録音した。またインタビュー中に研究者が感じたことや考えたことは理論的メモノートにメモに書き留めてインタビューを想起するために用いた。
3. インタビュー時間は対象者の疲労感などを考慮し60分程度と設定したが、延長の場合は対象者の許可を得た。延長時は対象者の疲労感や精神的苦痛に配慮し、適宜休憩を設けた。

VII. データ収集場所

COVID-19の感染防止やプライバシー保護が可能な場所を条件とし、安心安全に配慮した空間とした。場所は対象者と2人で相談し、①対象者の勤務施設の面談室、②対象者の自宅付近の個室のある施設、③WEB面談から選定した。

VIII. インタビュー項目の構成内容（資料6参照）

1. ドッグセラピーの副次的(Gundersen & Johannessen,2018; Markovich,2011; Machová ,2019; LaFrance et al.,2006; Hall et al.,2016)や、リフレクションの重要性(諏訪部, 2007)を考慮し、研究者が回復期脳血管疾患患者に対するドッグセラピーを見た経験を通して作成した。
2. 看護師が経験した回復期脳血管疾患患者のドッグセラピーやそのドッグセラピーの看護師の受け止め、ドッグセラピーの看護への影響の看護師の認識をインタビュー項目とした。
3. インタビューガイドとインタビュー項目は、指導教員と M-GTA を用いた質的研究を実施したことがある修士号取得者にスーパーバイズを受け妥当性を確保した。また、脳血管疾患患者の看護に精通している看護師にプレインタビューを行うことでインタビューガイドと項目を精練し信頼性を高めた。

IX. データ収集手順

1. 候補者のインターネット環境に合わせたアプリケーションを事前に設定し、インタビュー前日までに URL と ID、パスワードを送付した。研究者はインタビュー15 分前には入室し、カメラ、音声、録画機能の確認をした。
2. インタビュー実施時、研究者は襟付きのシャツにスーツを着用し、装飾品は着用せず、化粧や髪型は清潔感のある装いで臨んだ。
3. 対象者が入室後、自己紹介を済ませ、世間話をしながらお互いの緊張を数分間解した。その後、対象者に書面を用い再度、研究目的、意義、方法、対象者、倫理的配慮について説明し適宜質問に答えた。インタビュー内容を IC レコーダーに録音し、理論的メモノートにメモを取ることを説明し許可を得た。IC レコーダーの作動状況や配置場所による録音ミスを防ぐため、試験的に対象者との会話を録音し確認した。また、アプリケーションツールの録画機能と IC レコーダーを使用するため、音声だけではなくインタビュー中の動画を録画することについても説明し許可を得た。
4. 半構成的インタビューガイドに基づき、インタビューを実施し、ICレコーダーの録音を開始した。インタビュー開始後は、対象者の疲労感を考慮し 30 分に一度トイレ休憩や給水確保できるよう対象者に確認した。また、インタビュー途中にインタビューにより対象者の心身の苦痛や動揺が見られる場合は、インタビューを一時中断し休憩

時間を確保し、それでも難しい場合はインタビューの中止を予定した。

5. 対象者が語りやすいように、沈黙が続いたとしても考える時間は設けるようにした。
また、対象者のインタビューでは対象者が自由に語れるよう誘導しなかった。

X. データ分析手法、手順

1. データ分析手法

データ分析は、M-GTA を用い木下(2020)の手法に準じた。理由は、データを継続的比較分析することで緻密で丁寧な質的研究ができる点、入り組んだ経験の複雑さである社会的相互作用のプロセスをインタビュー内容の解釈から明らかにする点、データに密着した人間行動の説明モデルの生成を目的とする点である。よってこの手法により、回復期脳血管疾患患者が受けたドッグセラピーの看護師の認識を明らかにできると考えたからである。

2. データ分析の手順

- 1) 逐語録作成：インタビューデータを逐語化する。作業途中で感じたことや考えたこと、疑問点は「理論的メモノート」に書き留めた。
- 2) 分析テーマと分析焦点者の確定：分析テーマは「回復期脳血管疾患患者が受けたドッグセラピーに対する看護師の認識」とし、分析焦点者は「回復期脳血管疾患患者がドッグセラピーを受ける場面にいた看護師」とた。しかし分析データと理論的メモノートを参考に、再度、分析テーマとデータとのマッチングを確認した結果、分析テーマは「ドッグセラピーを受けた患者についての看護師の認識プロセスの研究～回復期脳血管疾患患者に焦点を当てて～」とし、分析焦点者は「回復期脳血管疾患患者がドッグセラピーを受ける場面にいた看護師」とした。
- 3) 分析ワークシートによる概念の比較検討とカテゴリーの生成：データを分析テーマと分析焦点者の視点からみていき文脈理解を深めた。概念生成は分析ワークシートに概念名、定義、ヴァリエーション、理論的メモの作成と修正を繰り返した。さらに類似例と対極例について検討し、自己の解釈が恣意的に偏らないよう留意した。
- 4) 概念比較からカテゴリー生成：生成された概念同士や複数の概念間を比較しカテゴリーを生成し、中心的カテゴリーを軸に継続的比較分析を行った。また必要で

あればサブカテゴリーの生成を考慮した。

- 5) 結果図とストーリーラインの作成：分析結果を確定するために、結果図とストーリーラインを作成した。

XI. データの真実性及び分析の妥当性の確保

1. インタビューガイドは妥当性を確保するため、文献検討や M-GTA を用いた質的研究を実施したことがある修士号取得者、脳神経疾患患者の看護に精通している看護師にプレインタビューを行うことでインタビュー技術の研鑽を積んだ。
2. 分析の真実性を高めるため、M-GTA の研究手法発案者や人と動物との相互作用に基づく健康の維持・増進に関する看護学研究者、M-GTA を用いた質的研究を実施したことがある修士号取得者、脳神経疾患患者の看護研究に精通する博士号取得者からスーパーバイズを受けた。

XII. 倫理的配慮

「ヘルシンキ宣言」「人を対象とする医学研究に関する倫理指針」に基づき、倫理的配慮を順守した。これらの倫理的配慮は「研究協力依頼書(資料1)」「研究参加のお願い(資料2)」を用いて対象者に紙面と口頭で説明した。

1. 研究対象者への配慮

1) 自己決定の権利の保障

研究参加、中断、辞退は対象者の自由意思の尊重に基づき、いかなる場合でも研究内容の十分な説明を行い、質問および同意撤回はいつでも可能であり、同意の有無は一切公言しなかった。研究参加を拒否、中断、辞退しても対象者の業務への支障や職場環境への影響はなく、一切の不利益は生じないことを対象者に説明し、対象者の意思決定を保証した。対象者はいつでも同意撤回ができるように同意撤回書と封筒を渡し、分析後に同意撤回の希望があった際はデータの使用可能範囲を確認する予定とした。

2) 研究対象者の選定について

- (1) リクルート施設の管理者に研究協力を依頼する際は、管理者の研究協力同意の有

無の返答方法をメールとし、研究協力の強制力を最小限にした。

- (2) 候補者の参加協力が得られる場合、研究者へ連絡する旨と研究者のメールアドレスおよび携帯電話番号を「研究参加のお願い(資料2)」の用紙に記載し、研究参加の強制力を最小限にすることとプライバシーを保護した。なお、資料2は候補者が理解できるように平易な日本語で記載し、口頭でも説明した。

3) 対象者が研究に参加することのメリットとデメリットについて

- (1) 対象者が研究参加することの直接的なメリットはなかった。しかし、インタビューの語りを通して看護師の自己の気づきが想起され、看護師自身の内省が深まる可能性があった。
- (2) デメリットは、過去を想起することによる心理的負担がかかる可能性や、時間の拘束が生じる可能性があった。対象者の状況に応じて、適宜中断または中止できるように配慮し時間管理を行った。万が一、インタビュー中に心身の不調などが出現した場合は、様子観察し、必要に応じて休息や受診をするように説明する予定とした。また受診した場合は、心身の安全確認のために受診後に対象者と電話連絡できるようにし、医療費は保険診療内とし研究者の Will 保険にて負担する予定とした。

4) インタビュー時の対象者の安全確保について

インタビューでは対象者が自由に語ることをできるよう誘導しないようにした。

COVID-19 の感染防止とプライバシーの確保ができることを条件とし、安心安全に配慮した空間とした。

5) 研究対象者やその関係者からの相談などへの対応について

研究の疑問や相談はいつでも研究者に連絡できることを伝え「研究参加の同意書(資料3)」に研究者の携帯電話番号とメールアドレスを記載し連絡先を伝えた。

6) プライバシーの保護について

- (1) インタビュー内容は全て IC レコーダーや WEB の録画機能を用い録音し、インタビュー中に適宜メモを取ることを説明し同意を得た。

- (2) インタビュー中は第3者にインタビュー内容が聞こえないように扉の開閉に留意した。またインタビュー時、研究者は個室にてイヤホンを装着した。

7) 個人情報の保護について

- (1) インタビューで知り得た内容は一切口外せず、対象者が所属する施設管理者やスタッフなどに決して申し伝わることをないよう倫理面に配慮した。
- (2) インタビュー内容の分析は、個人名や病院名が特定されることをないよう符号化し、その符号と照合できる資料はパスワードを付けた電子ファイルに保管し研究者以外は閲覧できないように管理した。分析上、必要のない個人情報や企業情報はインタビューの録音データから逐語録を作成する段階で確実に削除した。
- (3) インタビューで知り得た情報や資料は大学指定のドライブで管理し、やむを得ず外部に持ち出す際は紛失・盗難に十分注意し、個人を特定できる情報を切り離した状態で厳重に管理した。本研究のデータおよび文書は、研究終了後より5年保存後、一切のデータを復元不可能な状態に消去またはシュレッダー等で細かく裁断し廃棄する。

8) 対象者の知る権利を保護するについて

希望する対象者には、他対象者の倫理的配慮が保持され、研究の独自性が保護される範囲で、研究計画書、方法、結果に関する資料を書面にて提示できることを説明した。

2. 研究に関する倫理的配慮

1) 研究方法や内容の妥当性、結果の信頼性確保

- (1) 研究は、当法人の研究倫理審査委員会の審査と研究機関長の許可を受けた研究計画書に従い、適切な方法で研究を遂行した。また、研究は指導教員の下行い、進行状況については適宜報告・連絡・相談を行い、必要時には指示を仰いだ。
- (2) インタビューガイドは妥当性を確保するため、文献検討や M-GTA を用いた質的研究を実施したことがある修士号取得者、脳神経疾患患者の看護に精通している看護師にプレインタビューを行うことでインタビュー技術の研鑽を積んだ。

- (3) 分析の真実性を高めるため、M-GTA の研究手法発案者や人と動物との相互作用に基づく健康の維持・増進に関する看護学研究者、M-GTA を用いた質的研究を実施したことがある修士号取得者、脳神経疾患患者の看護研究に精通する博士号取得者から分析プロセスについてスーパーバイズ及びメンバーチェックングを受けた。

2) 研究者の態度

研究者は常に、正直、誠実に判断、行動し、自らの専門知識や技能の維持向上に努め最善の努力を払った。

3) 研究終了時の対応

本研究終了時には聖路加国際大学大学院看護学研究科の在籍中に倫理審査委員会に報告書を提出し、倫理的問題の有無について報告する予定とした。

4) 研究結果の公表

研究終了後は修士論文として本学の図書館に保管し、論文要項と参考文献は聖路加国際大学リポジトリにて公表する。また、学術集会や学会誌にて速やかに公表する。

5) 利益相反

本研究における、利益相反はなかった。

6) 研究対象者への謝礼とインタビュー参加時に発生する経費について

研究参加の謝礼として三千円分の QUO カードを渡した。また、WEB でのインタビューの際、対象者のインターネット回線が固定でない場合は通信費として千円の QUO カードで保障する予定とした。

第4章 結果

M-GTA は、【研究する人間】の視点から、基礎的立場設定に基づき継続的比較分析を進めていくため、研究者の解釈は自動的に結果に反映されるものとする。

I. 対象者の概要(表1)

研究の条件に該当し、研究参加に承諾した対象者は8名であった。インタビューは一人につき1回行い、インタビューの平均時間は51.1(27-90)分であった。

表1 対象者の概要

対象者	看護師の経験年数	所属病棟	語りの中で対象となった患者の疾患名
A	16 年	回復期リハビリテーション	脳梗塞
B	18 年	脳神経内科・外科	脳梗塞
C	25 年	回復期リハビリテーション	※脳血管疾患
D	31 年	回復期リハビリテーション	脳梗塞
E	26 年	回復期リハビリテーション	脳梗塞
F	15 年	脳神経内科・外科	脳梗塞
G	17 年	回復期リハビリテーション	※脳血管疾患
H	4 年	回復期リハビリテーション	※脳血管疾患

※語りの中で対象となった患者の詳細な疾患名については、ドッグセラピー実施より時間が経過していたため、看護師の記憶になく詳細が語られなかった。

II. 分析結果

分析データと理論的メモノートを参考に、再度、分析テーマとデータとのマッチングを確認した結果、分析テーマは「ドッグセラピーを受けた患者に関する看護師の認識プロセスの研究～回復期脳血管疾患患者に焦点を当てて～」とし、分析焦点者は「回復期脳血管疾患患者がドッグセラピーを受ける場面にいた看護師」に確定した。

1. 抽出した概念、サブカテゴリー、カテゴリー

分析の結果、4 中心のカテゴリー、10 カテゴリー、14 サブカテゴリー、48 概念が生成された(表2)。サブカテゴリーは、概念とカテゴリーの相互比較から、概念とカテゴリーの関係をより分かりやすく表現したい場合のみ生成した。これら関係性の全体像を表現し

たものを、結果図に示した(図1)。

結果図等の説明およびストーリーラインについて述べる。次に、プロセスを構成する中心のカテゴリーとサブカテゴリーおよび概念について述べた上で、サブカテゴリーと概念の関係性について述べる。続いて、各カテゴリーのサブカテゴリーおよび概念について述べた上で、サブカテゴリーと概念の関係性について述べる。最後に各カテゴリー間の関係性について述べる。

なお、文章中の表記はカテゴリー【】、サブカテゴリー<>、概念[]を用いて表記している。また対象者の語りの具体例(以下、ヴァリエーション)では、概念生成において特に重要となった点に下線を引いた。

表2 プロセスを構成するカテゴリーと概念

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	定義
リハビリテーションに消極的		こころ閉ざす	患者が後遺症により、誰との関わりも拒むと感ずること。
		無関心	患者が後遺症により、何に対しても心にかけないと感ずること。
		無気力	患者が後遺症により、何をするにも意欲的に行動できないと感ずること。
		怒りあらわ	患者が後遺症により、誰と接しても怒りの感情をぶつけると感ずること。
		もどかしい思い	患者が失語症により発語できないことへのはがゆさを、看護師にぶつけると感ずること。
患者との関係が行き詰まる	後遺症により患者とのコミュニケーションが困難	こころが挫ける	患者との関係が上手くいかず、患者との関係に消極的な感情を抱くこと。
		打っても響かない	患者と関係を築くために患者に働きかけても、何の反応も得られないこと。
		関わりが裏目に出る	患者に対する関わりが、反って患者を怒らせてしまうこと。
		為す術無し	患者と良好な関係を構築する方法がなく、どうすることもできないこと。
患者のドッグセラピー適合の可否を評価	現状を打破する糸口	セラピー適合の可否を評価	患者の犬の好みや犬飼育歴について患者本人や家族に確認し、ドッグセラピーの適用を判断すること。

ドッグセラピーを 実施する		物は試し	ドッグセラピーによる患者の反応は定かでないが、実施してみる価値があると考え試行すること。
		感情へのアプローチ	患者の感情が良い方向に変化することを目的に、ドッグセラピーを実施すること。
		チームで関わる	多職種間で連携しながらドッグセラピーを患者に実施すること。
まるで別人	患者に意欲の灯がともる	こころ解ける	セラピードッグとの関わりにより、患者が他者に対し怒りや拒否反応を見せなくなると感じる。
		意思が芽生える	セラピードッグとの関わりにより、患者が自らの意思で行動するようになる。
		笑顔ほころぶ	セラピードッグとの関わりにより、それまで固かった患者の表情に笑顔がうまれる。
もう一度向き 合ってみる	抵抗が和らぐ	衝撃覚える	ドッグセラピーで患者が日頃見せない表情や反応を表出し、強く印象に残ること。
		もう一度向き合ってみる	ドッグセラピーでの患者の反応により、再び関係性構築を試みようと思える。
		笑顔の連鎖	ドッグセラピーで患者が笑顔になると看護師自身の嬉しい感情が芽生え、患者と関わりやすくなる。
	関係構築の 媒介役ができる	共通の話題ができる	患者がドッグセラピーを受け入れたことで、患者との共通の話題ができる。
		負の感情の なだめ役	ドッグセラピーの話題を活用し、患者の怒りや不快感情を和らげる。
		リハビリ意欲の 引き立て役	ドッグセラピーの話題を活用し、患者の意欲を引き立てる。
		感情の 引き出し役	ドッグセラピーの話題を活用し、患者のより詳細な情報を引き出す。

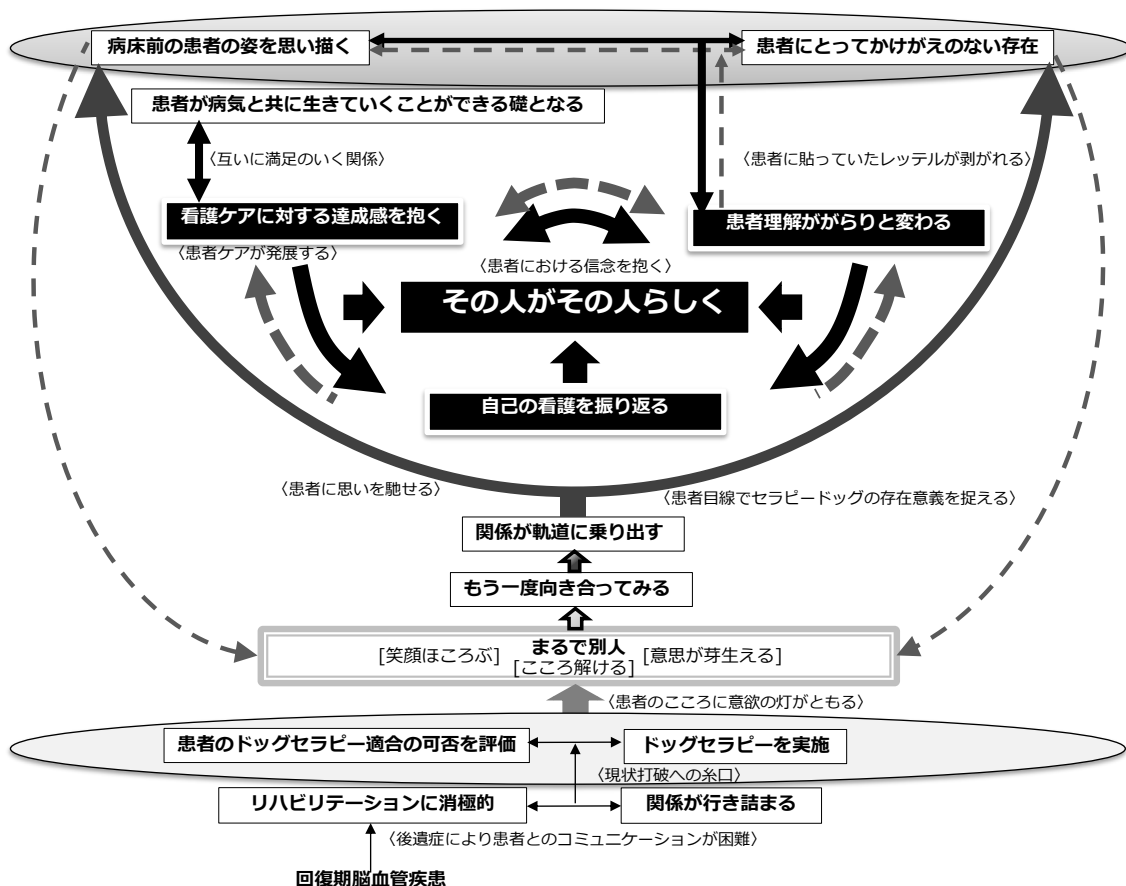
関係が軌道に 乗り出す	ケアが受け入れ られ始める	他者との交わり 取り戻す	ドッグセラピーを契機に、患者が再び 他者と関係を築くことができるように なると感じる。
		心情吐露	ドッグセラピーを契機に、患者がこころ を開き自ら思いを伝えるようになると 感じる。
		病気と向き合い 始める	ドッグセラピーが契機となり、患者の 病気の受け入れが少しずつ進むこと。
		ケアを受容し 始める	ドッグセラピーを契機に、患者が看護師 にケアされることを受け入れ始めるこ と。
	コミュニケー ションが捗る	意図することが 分かるようにな る	患者が反応を示すことにより、患者が 伝えたいことが分かるようになること。
		こころの距離が 近くなる	患者との間にあった隔たりがなくなり、 患者に寄り添いやすくなること。
	タイムリーに 介入できる	タイムリーな 介入	患者が看護師を受け入れ始め、患者の 必要に応じて看護介入ができること。
病床前の患者の 姿を思い描く	患者に思いを 馳せる	本来の姿とは	患者との関係が軌道に乗り出し、看護師 が知らない入院前の患者について考える こと。
患者にとっては かけがえのない存在	患者目線で セラピードッグ の存在意義を 捉える	家族のような 存在	患者にとってセラピードッグは、 家族のような存在であると感じること。
		ありのままで いれる存在	患者にとってセラピードッグは、 無条件に認めてくれる存在であると 感じる。
		かつての自分を 取り戻せる場	患者にとってのドッグセラピーの場は、 これまでの自分の生活を思い出せる環境 であると感じること。
患者理解ががらりと 変わる	患者に貼って いたレッテルが 剥がれる	固定観念覆る	患者との関係に変化がみられ、 これまで抱いていた患者に対する理解が 大きく変わる。
		関わりが増える	患者との間にあった隔たりが薄れ、 患者と関わる機会が増えること。

患者が病気と共に生きていくことができる礎となる	互いに満足のいく関係	もう一度自分らしく生きる	患者がもともとの自分らしさを取り戻し生きていけると感じることを。
		障害を乗り越える	患者が後遺症により話しにくさがあるも、言葉で示す努力をすると感じることを。
		想像以上に離床が進む	看護師が想像していた以上に患者の心身の機能が向上すること。
		やっぱり良かった	患者の心身の回復に、ドッグセラピーが良い影響を及ぼしていると改めて実感すること。
看護ケアに対する達成感を抱く	看護ケアが発展する	可能性が広がる	患者が回復の一途をたどり、看護の方向性について選択肢を広げられること。
		方向性が定まる	患者に対する理解が深まり、ケアの在り方に確信が持てること。
		尊重できる	患者とコミュニケーションを図ることで、本人を尊重したケアができること。
自己の看護を振り返る		ケアの在り方を再考	患者の可能性を見出すことができる支援が必要であると、ケアの在り方について再考すること。
		こころの拠り所の大切さ	患者にとって希望や目標を抱くことは、病気とともに生きていく上での支えになると改めて実感すること。
その人がその人らしく	看護における信念を抱く	可能性を見出す支援	患者の可能性を引き出す支援をしたいと信念を抱くこと。
		思いが表出できる支援	患者が思いを伝えられる支援をしていきたいと信念を抱くこと。
		主体性を引き出す支援	患者が自らの意志で行動できるよう支援していきたいと信念を抱くこと。

2. 結果図の説明(図 1)

■は中心的カテゴリ、□はカテゴリ、二重□は転換期となるカテゴリ、<>はサブカテゴリ、[]は概念を示す。→実線矢印は、時間軸に沿った看護師の認識を示している。

また↔点線矢印は、反復する看護師の認識を示している。両矢印⇄は、カテゴリ間の関係性を示す。矢印の太さや濃淡は、患者との関係が軌道に乗り出すに向け太く、色濃くなる。



3. ストーリーライン(図 1)

回復期脳血管疾患患者（以下 患者）は、失語症や麻痺などの後遺症により[もどかしい思い]を抱き、[こころを閉ざし][怒りの感情をあらわ]にし、また何に対しても意欲的になれず、[無気力]や[無関心]になる傾向にある。そのような傾向にある患者は【リハビリテーションに消極的】であることが多い。そのため、担当患者がドッグセラピーを受ける場面にいた看護師（以下 看護師）は、患者が回復できるよう積極的に働きかけるが、患者を

反って怒らせてしまったり、リハビリテーションに対する更なる拒絶反応をみせたりと、[関わりが裏目に出る]。そのことで看護師はこころが挫け、患者との関わりに抵抗感を抱き、患者の<後遺症により患者とのコミュニケーションが困難>となり、【患者との関係が行き詰まる】。このような[現状を打破するための糸口]として、【患者のドッグセラピー適合の可否を評価】した上で、【ドッグセラピーを実施】する。患者はセラピードッグと触れ合うことで<こころに意欲の灯がともり>、【まるで別人】のように、[こころ解け]、[意思が芽生え]、[笑顔ほころぶ]様子を見せる。そのことに看護師は衝撃を覚え、<患者への抵抗感が和らぎ>、患者と【もう一度向き合ってみる】と思えるようになる。またドッグセラピーという関係構築の媒介役を頼りに関わりを持つことで、看護師と<患者とのコミュニケーションが捗り>、<ケアが受け入れられ始め>、患者の必要に応じて<タイムリーに看護ケアを介入できる>ようになり、次第に両者の【関係が軌道に乗り出す】。そのことで看護師は、<患者に思いを馳せる>ようになる。

<患者に思いを馳せる>中で、看護師は二つの大きな気づきを得る。一つ目は、看護師が知らない患者の姿である、【病床前の患者の姿を思い描く】。また二つ目は、患者目線でセラピードッグの存在意義を捉えることで【患者にとってはかけがえのない存在】であると気づくことである。一つ目の【病床前の患者の姿を思い描く】ことは、【まるで別人】のように患者の変化に衝撃を覚えることが影響している。またセラピードッグが【患者にとってはかけがえのない存在】であるからこそ、患者が【まるで別人】のように変化する要因になることに気づく。これら気づきを得ることで、<患者に貼っていたレッテルが剥がれ>、【患者理解ががらりと変わる】。患者理解が大きく変化することで、看護ケアが発展し、【ケアに対する達成感を抱く】。またそれにより、看護ケアが向上し、終局的には【患者が病気と共に生きていくことができる礎となり】、看護師と患者は<互いに満足のいく関係>となる。これら二つの変化である、【患者理解ががらりと変わる】と【ケアに対する達成感を抱く】が相互に影響することで、徐々に看護師自身に目が向けられ、【自己の看護を振り返る】きっかけとなる。これにより、看護師の患者理解がより深まり、看護ケアに対する達成感をより一層に感じ、三つの認識【患者理解ががらりと変わる】、【看護ケアに対する達成感を抱く】、【自己の看護を振り返る】が相互に動き始める。これら三つを経て、看護師は病床前の患者の姿や患者にとってかけがえのない存在であるセラピードッグについて、改めて深く考えることとなる。その結果、看護師は、患者にとって【その人がその人らしく】生きていけるよう支援をしていきたいと、信念を抱くように

なる。

4. プロセスを構成する4中心のカテゴリー、3サブカテゴリーおよび10概念

1) 中心のカテゴリー

ドッグセラピーを受けた患者についての看護師の認識プロセスの中核をなす中心のカテゴリーは、【患者理解ががらりと変わる】、【看護ケアに対する達成感を抱く】、【自己の看護を振り返る】、【その人がその人らしく】の4つの相互作用から成り立つ。以下に、カテゴリー間の関係性および詳細を説明する。

回復期脳血管疾患患者がドッグセラピーを受ける場面にいた看護師は、看護師が患者に貼っていたレッテルが剥がれ、患者に対する理解ががらりと変わることで自己の看護を振り返り、患者の本来の姿を引き出せる支援をしたいと信念を抱くようになった。信念を抱くまでには、二つの転換期により、[患者に貼っていたレッテルが剥がれ]、【患者理解ががらりと変わった】。患者理解が大きく変化したことで、看護ケアが発展し、【ケアに対する達成感を抱いた】。またそれにより、看護ケアが向上し、終局的には【患者が病気と共に生きていくことができる礎となり】、看護師と患者は[互いに満足のいく関係]となった。これら二つの変化が相互に影響したことで、徐々に看護師自身に目が向けられ、【自己の看護を振り返る】きっかけとなった。これにより、看護師の患者理解が深まり、看護ケアに対する達成感をより一層に感じ、三つの認識【患者理解ががらりと変わる】、【看護ケアに対する達成感を抱く】、【自己の看護を振り返る】が相互に動き始めた。これら三つを経て、看護師は病床前の患者の姿や患者にとってかけがえのない存在であるセラピードッグについて、改めて深く考えることとなった。その結果、看護師は、患者にとって【その人がその人らしく】生きていけるよう支援をしていきたいと、看護における信念を抱くようになった。

このように【患者理解ががらりと変わる】、【看護ケアに対する達成感を抱く】、【自己の看護を振り返る】、【その人がその人らしく】の4つのカテゴリーの相互作用の循環の中で、看護師は患者の本来の姿を引き出せる支援をしたいと信念を抱くようになった。

2) カテゴリー【患者理解ががらりと変わる】

このカテゴリーは、ドッグセラピーを契機に看護師が患者と良好な関係を構築できることで、看護師がこれまで抱いていた患者に対する固定観念が覆り、患者に対する理解

が大きく変化することを意味している。このカテゴリーは、1 サブカテゴリーと 2 概念で成り立つ。

(1) サブカテゴリー＜患者に貼っていたレッテルが剥がれる＞

このサブカテゴリーは、看護師が患者に対し一方的かつ断定的につけた評価が、患者理解に向かう方向に変化することを意味している。以下はこれを構成する 2 概念である。

① 概念：[固定観念覆る]

この概念の定義は、「患者との関係に変化がみられ、これまで抱いていた患者に対する理解が大きく変わること。」である。以下にヴァリエーションの 3 例を載せる。

- 多分もともとは怒りっぽくてちょっとブスっとしている患者さんで。とかっていうのが、こんな風に笑うんだとか、穏やかな一面もあるんだなっていうのは凄い分かりました。(…省略) ドッグセラピーでこんな笑ってたんだよとか、こんな穏やかな表情をスタッフ達も写真みたりとかすると、その患者さんに写真を実際にそれを見せてこういう一面もあるんじゃない、とかっていうのをこう話すと、なんかスタッフ達が患者さんを見る目が変わったんだなっていう風に感じました。(B 氏)
- 会話が増えるってことはやっぱりその本当は言ったらこちらが言ってることだけを話し返事だけをしてくれて、お喋りじゃないのかなとかちょっと疲れているから今はしたくないのかなっていう患者さんでも、やっぱり会話がちょっと弾んでくると、本当は明るい感じで、ほんまは喋りたかったのかなっていう性格的にこっちが思い込んでいた部分があります。(E 氏)
- この患者さんは、最初は、何も考えられなかったのかなっていうことを聞いていて思うんですけども。「別に何とも思っていなかった」みたいなことを言ったんです。で、受傷しなんとも思わないことなんてないって私たちは判断してしまうんですけども、何もないっていうのはなんですか？って聞いたら、「思ったより痛みがなかった、病気したのにも関わらず痛みもない、感覚もない、なんにもない」みたいなところで、今すぐ訴えるという症状自体がなかったということなんです。なので、別に言うこともなかったし。なので、「言ったから麻痺なんか治るわけでもないし、今すぐどうこうなるわけでもないし」っていう風なことを後で仰ったんですよ。(…省略) 最初は別に何とも思わなかったから話さなかったけど、もともと犬は好きだから、来てくれても毎日毎日見ているとやっぱり飼ってるみたいな感覚で、嬉しくなってきた

という風なそんなことまで仰ったんですよ。(A氏)

これらのヴァリエーションは、患者は怒りっぽい性格や話し好きではなく、また無気力であると看護師は断定的な見方をしている。しかし、ドッグセラピーを契機に看護師と患者との関係が良好になり、患者は笑うようになり、また自ら話すようになり、さらにはその時の状況について患者が説明するなどの変化が見られる。そのことで、看護師は患者には穏やかな一面や明るい一面もあること、さらには自分の解釈で患者を見ていることに気づき、これまで抱いていた患者に対する理解が大きく変化する例である。このように、ドッグセラピーが契機となり、看護師の患者に対する固定観念が覆っていた。

② 概念：[関わりが増える]

この概念の定義は、「患者との間にあった隔たりが薄れ、患者と関わる機会が増えること。」である。以下にヴァリエーションの1例を載せる。

そうですね。その方を知ったことで、より深い関わりというかができてきたのかなと思います。どういう風に感じているのかなって患者さんのことを考えたりもすると思うんですけど、穏やかな日が増えてるってこともあって、体調も整ってきたっていうのもありますし、そういうところから関わりが増えていったって事実かなって思います。(F氏)

このヴァリエーションでは、ドッグセラピーが契機となり、患者に対する理解が深まることで患者のところに一步踏み込む関わりができ、患者と関わる頻度が増える一例である。このように、看護師はドッグセラピーを契機に、患者とのところの距離が近くなり、患者と関わる機会が増えていた。

(2) サブカテゴリー、概念間の関係性

看護師は二つの大きな気づきを得ることで、看護師の患者に対する[固定観念が覆り]、<患者に貼っていたレッテルが剥がれ>、【患者理解ががらりと変わる】。患者理解が大きく変化することで、患者との間にあった隔たりが薄れ、患者との[関わりが増える]ようになるという関係性がある。このように<患者に貼っていたレッテルが剥がれる>を基点とし、[固定観念覆り]、[関わりが増える]は相互に影響し合う。

3) カテゴリー【看護ケアに対する達成感を抱く】

このカテゴリーは、ドッグセラピーを契機に、患者理解が深まることで看護ケアが発展し、看護師が仕事にやりがいを感じられることを意味している。このカテゴリーは、1 サブカテゴリーと 3 概念で成り立つ。

(1) サブカテゴリー<看護ケアが発展する>

このサブカテゴリーは、ドッグセラピーを契機に患者と良好な関係を構築し患者理解が深まることで、患者に対するケアがより豊かで確信をもてるものに広がることを意味している。以下は、これを構成する 3 概念である。

① 概念：[可能性が広がる]

この概念の定義は、「患者が回復の一途をたどり、看護の方向性について選択肢を広げられること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

家に帰れるのかどうかっていうところはほとんどのスタッフは難しいんじゃないかなって思っていたと思うんですね。やっぱり、こんだけすぐ怒ってしまったりとか、多分、多分、結構高齢な奥さんと暮らしていた方だった気がするので、奥さんのところに帰ったところで制止もできないし、っていうところが。あの一、これだけリハビリが進み、離床も進んで、そんなにこう怒ったりするんじゃないけば、自宅に帰るっていう方向で進めても良いのかな、っていう風に切り替えられたのは大きく変わったところだと思います。(B 氏)

このヴァリエーションは、看護師は、患者は常に怒りの感情を見せるため、退院後在宅復帰は難しいと考えている。しかし、患者理解が深まり、看護ケアが発展することで、患者は病気と共に生きていくことができるまでに回復する。それにより看護師は、これまで選択肢にもなかった患者の在宅復帰を視野に入れることができ、患者の今後の方向性について選択肢を広げられる一例である。このようにドッグセラピーが契機となり、看護師の看護ケアの可能性が広がっていた。

② 概念：[方向性が定まる]

この概念の定義は、「患者に対する理解が深まり、ケアの在り方に確信が持てること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

やっぱり自分のこと色々話してくれたりっていうところでは、まず一つパーソナリティ的なところでは理解できるようになりました。あと症状だったりとか今思っていること、これは最初何も言わなかったことがどんどん吐露されて、何が心配なのか、何が今問題なのかっていう、今の段階と今後に繋がるようなことまでも聞けたのでいわゆる指導だとかゴールを目指すっていう判断をするのにも役立ったようなことを仰っていたので。そういった意味では患者さんの現状とか思いとか、こう、経過に伴う、今後の経過に繋がったというふうに理解が深まりました。(A氏)

このヴァリエーションは、看護師はこれまで患者と思うようにコミュニケーションが図れず、患者を理解することができないために、ケアの在り方や、患者の退院後の目標を定めることができず不確かさを抱きながらケアをしている。しかし、ドッグセラピーを契機に患者が感情を表出できることで、看護師の患者理解が深まり、患者の今後の目標が明らかになり、現段階での必要なケアが明確になる一例である。このように、ドッグセラピーが契機となり、看護師は患者の今後のケアの方向性を定めることができた。

③ 概念：[尊重できる]

この概念の定義は、「患者とコミュニケーションを図ることで、本人を尊重したケアができること。」である。以下にヴァリエーションの一例を示す。

だから、1日の中でも、この時間にシャワーを浴びたいとか、入浴したいとかっていうこともあるので。入院生活のリズムっていうのも、患者さんの希望を反映できるっていうところではお互いがこうやりやすいし、満足が得られるっていうことになった。何も話さないと本当に、よくわからないし、聞いても答えないし、じゃあこんなんでも良いですかみたいになっちゃうし。本当にやりにくかったと思います。色々言うようになったもんだから、もちろんS情報として発言としても捉えられるし、見た目も色々動作が出てくると見ても分かりやすいし、情報としても得られるし、そういった差がほかの看護師からもそういったことが聞かれました。(A氏)

このヴァリエーションでは、看護師はドッグセラピーを契機に患者とコミュニケーションを図ることができ、患者が思いを表出することで患者の希望に則したケアができる一例である。このように、ドッグセラピーが契機となり、看護師は患者を尊重したケアを実施

することができた。

(2) サブカテゴリー、概念間の関係性

看護師の患者理解が大きく変化することで、患者へのケアの在り方に確信が持て、患者ケアの[方向性が定まる]。また理解が深まることで、患者の希望に沿ったケアができ、患者を[尊重できる]。これら2つの概念が相互に影響し合う中で、＜看護ケアが発展する＞。このことで患者が回復の一途をたどり、看護の方向性について選択肢を広げることができ、患者の[可能性が広がる]。このように、3つの概念は、＜看護ケアが発展する＞ことを基点に、相互に影響し合う関係である。

4) カテゴリー【自己の看護を振り返る】

このカテゴリーは、看護師が自己の看護を振り返り、看護していく上で大切なことに気づくことである。このカテゴリーは、2つの概念で成り立つ。

① 概念：[ケアの在り方を再考]

この概念の定義は、「患者の可能性を見出すことができる支援が必要であると、ケアの在り方について再考すること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

なんでもこう自分主体で自分の知識の範囲の中でゴールを設定したりとか、あの一、決めつけるっていうよりか、色んな可能性があるんで、っていうところの見方は変わったかなと思います。(…省略)例えば、さっきと被るんですけども、お家に帰るのが難しいよねとか、ベッドから離れた生活、車いすだとしても、そこにもって行くのって無理だよね多分どっかにはあって。患者さんと関わっていたところが、もしかしたら変化するかもって
いうところは、あの一忘れちゃいけないなってところになっているのかなって思います。

(B氏)

このヴァリエーションは、患者と関わる際は患者に先入観を持って関わるのではなく、患者には変化する可能性が少しでもあることを忘れてはいけないと、看護師自身が看護ケアをする上での在り方について考え直す一例である。このようにドッグセラピーが契機となり、看護師は自己の看護ケアについて改めて考え直した。

② 概念：[こころの拠り所の大切さ]

この概念の定義は、「患者にとって希望や目標を抱くことは、病気とともに生きていく上での支えになると改めて実感すること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

お家でわんちゃん飼っていたっていうのもあるのかもしれないんですけど、最後帰る時に飼っている犬と散歩に行きたいって言っていたので。それだけお家にいる時からね、大事にされていたのかなって思うんですけど(…省略)きっかけ作りってすごく大事なんだなって思います。わんちゃんと一緒にリハビリをすることでこれだけ患者さんが変われるっていうことが分かったので、もっといろんな人にわんちゃんに関わったりとかできるのになって。(…省略)患者さんが前向きになってくれたっていうのは、治療の面でもリハビリしていく面でもすごく大事なんじゃないかなって思っていて。患者さんの気持ちが上に向くっていうのは、治療にもすごく影響が出るので、日常生活を送る上でも生活に張りが出るっていうところは大切かなって。(F氏)

このヴァリエーションはドッグセラピーが契機となり、患者が飼い犬と散歩に行きたいという目標ができ、それは患者が療養生活を送る上での心の支えになることに改めて気づく一例である。このようにドッグセラピーが契機となり、看護師は患者にとって心の拠り所となる目標や夢は大切であると改めて認識していた。

(1) 概念間の関係性

看護師は、患者理解が深まることで自己の看護を振り返り、[ケアの在り方を再考]する。またその中で、患者にとって希望や目標を抱くことは、病気とともに生きていく上で支えになるのだと、[こころの拠り所の大切さ]に気づく。このように、この2つの概念は相互に影響し合う関係である。

5) カテゴリー【その人がその人らしく】

このカテゴリーは、看護師の内省が促され、患者の本来の姿を引き出せる支援をしたいと信念を抱くことを意味しており、1サブカテゴリー、4概念で成り立つ。

(1) サブカテゴリー<看護における信念を抱く>

このサブカテゴリーは、看護師は自己の看護を振り返り、看護における行動の基盤となる態度を胸の内に秘めることを意味している。以下は、これを構成する3概念である。

① 概念：[可能性を見出す支援]

この概念の定義は、「患者の可能性を引き出す支援をしたいと信念を抱くこと。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

えーえっと、うーん、そうですねやっぱり、なんか、患者さん家族の負担とか色々考えるとそうは言い切れないところはあるんですけど、ま、どんな麻痺が残ったり障害が残ったり、中々お家で生活するのが難しい患者さんだとしても、やっぱりその人がその人らしく生活できるのって家が大きいのかなって患者さん見ていると思うので。やっぱり可能な限りは機能が回復したりとか、それ以上進行しないようなお手伝いをさせてもらいながら少しでも早く家に帰れるような支援ができれば良いなと思います。(B氏)

このヴァリエーションは、ドッグセラピーが契機となり、看護師自身の先入観が取り払われ、患者の退院後の方向性について在宅復帰するという選択を拓けられる。この経験を通じて、今後脳血管疾患患者を看護する上では、患者の可能性を引き出せるような支援をしていきたいと信念を抱く一例である。このようにドッグセラピーが契機となり、看護師は患者の可能性を見出せるような支援をしていきたいと思いを抱いていた。

② 概念：[思いが表出できる支援]

この概念の定義は、「患者が思いを伝えられる支援をしていきたいと信念を抱くこと。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

この事例を通していうと、患者さんの発言をいかに得られるかっていうのがやっぱり改めて重要なことなんだなって。他の患者さんにもやっぱりいかしていかないといけないと改めて感じた。やっぱり発言が得られるというのは、すごく看護する上で重要なことで、やっぱり援助の中身とか具体的なものとか、あのー変わってくるわけですから。そういった意味では、何だろう、アニマルセラピーするしないでなくても、患者さんに関わる必要性だとか、そういったことは、あのー改めて見直すきっかけになったかなと思います。

(A 氏)

このヴァリエーションは、ドッグセラピーが契機となり、看護師は自己の看護を振り返り、看護ケアにおけるコミュニケーションの重要性について再認識する。そのことで、今後脳血管疾患患者を看護する上では、患者が思いを伝えられる支援をしていきたいと信念を抱く一例である。このように、ドッグセラピーが契機となり、看護師は患者が思いを表出できるような支援をしていきたいという思いを抱いていた。

③ 概念：[主体性を引き出す支援]

この概念の定義は、「患者が自らの意志で行動できるよう支援していきたいと信念を抱くこと。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

きっかけ作りってすごく大事なんだなって思います。わんちゃんと一緒にリハビリをすることでこれだけ患者さんが変わるっていうことが分かったので、もっといろんな人にわんちゃんに関わったりとかできるのかなって。どの方っていうと難しいのですが、色々な所で関わりを増やしたいと思っています。(…省略)患者さんがやっぱりこれから生活していくのにあたって、何か楽しみだったりとか生活する上での目標を持っていないと中々頑張れないというか、頑張っほしいわけじゃないですけども。目標とかを決めるきっかけになるのかなって思っていて。それが叶えられるかとかではなくって、そういう気持ちをもっていくことが大事かなって思います。(…省略)患者さんがちょっとした希望じゃないですけど、そういうのも持ってほしいなって思っていて。これから多分、日常生活に戻るっていうところで、少しでもそれがきっかけで気持ちが上に向いてくれたりとかそういうところがあるのであれば、そういうところを大事にして前向きに過ごしてもらいたいなって思います。(F 氏)

このヴァリエーションは、ドッグセラピーが契機となり、看護師は自己の看護を振り返り、患者が夢や楽しみなどの目標を抱くことは闘病生活において患者の心の支えになり、リハビリテーションを主体的に取り組める原動力となることに気づく。その気づきにより、今後脳血管疾患患者に対し、患者が自らの意志で行動できるような支援をしていきたいと信念を抱く一例である。このようにドッグセラピーが契機となり、看護師は患者の主

体性を引き出す支援をしていきたいと思いを抱いていた。

(2) サブカテゴリー、概念の関係性

これら3つの概念は単独で存在する。しかし、＜看護における信念を抱く＞ことを基点に、それぞれの概念が関係している。

5. プロセスを構成する10カテゴリー、11サブカテゴリーおよび38概念

1) カテゴリー【リハビリテーションに消極的】

このカテゴリーは、回復期脳血管疾患患者が、失語症や麻痺などの後遺症により、リハビリテーションを意欲的に取り組むことができないと感ずることである。このカテゴリーは5概念から成り立つ。

① 概念：[こころ閉ざす]

この概念の定義は、「患者が後遺症により、誰との関わりも拒むと感ずること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

看護師にも、話そうとはしてくれるんですけど、伝わらないとすぐにふいってしちゃう。感じがあったかなと思います。(…省略)ふさぎ込むというか、もう話さなくても良いって感じなのかなと思います。(…省略)結構面会を毎日のように来られていたんですけど、帰る時涙を流されていたりとかが見られたので。家族の方もすごく気にしていたというか。

(F氏)

このヴァリエーションは、患者は失語症により思うように思いが伝わらないことで他者との関わりを拒む一例である。このように患者は脳血管疾患の後遺症により、誰との関わりにもこころを閉ざす様子を見せていたと看護師は感じていた。

② 概念：[無関心]

この概念の定義は、「患者が後遺症により、何に対しても心にかけないと感じること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

拒否まではいかなんですけど、行ってもなんていうのかな、じーっとこう窓の外を見た

りだとか、(…省略)来られると迷惑ですか？と聞くと、そんなことはないというふうに、それでセラピー自体もいらないと言わないんですけれども、別に犬を見ないし、だからといってハンドラーや私なんかに話しかけないし、ただ外を見たり周りを眺めたりっていうふうなことで時間が過ぎたというのが一番最初ですね。ただ、拒否まではいかないんですけれども、興味を示さなかったという風な感じです。(A氏)

このヴァリエーションは、患者は脳梗塞の後遺症により、看護師が患者の部屋に伺った際にも常に窓を眺めており、何に対しても興味を抱く様子を見せない一例である。このように患者は、脳血管疾患の後遺症により、何に対しても無関心であったと看護師は感じていた。

③ 概念：[無気力]

この概念の定義は、「患者が後遺症により、何をするにも意欲的に行動できないと感ずること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

リハビリではリクライニングの車いすに乗ってリハビリに行かれるって方で、自分から何か例えば物を取ろうとやっていうそういった行動は一切なくて、ちょっと手を握ってくださいって言ったら手を握ってくれるし位の反応の方だと思うんですけど。そういった方がドッグセラピーに参加されたときに、ちょっと自分からわんちゃんに触ろうっていう行動が見られてたのですごい良いことだなと思って覚えています。(…省略)例えばね、顔がかゆいとか少し手を動かしたりってことはあるかもしれないですけど、外に向かって何かってことはそんなになかったとは思います。(D氏)

このヴァリエーションは、患者は脳梗塞を発症後、何をするにも意欲的になれず、痒いなどの生理反応以外、自ら意思を持って行動することが見られない一例である。このように患者は、脳梗塞の後遺症により、何をするにも意欲的に取り組めないと看護師は感じていた。

④ 概念：[怒りあらわ]

この概念の定義は、「患者が後遺症により、誰と接しても怒りの感情をぶつけると感じ

ること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

看護師がこう何かお手伝いをしたりとか、身体を動かそうとするとそれがきっかけに怒り出してしまったり、制止がきかなくてベッドから降りて一人で歩こうとしてしまったりとか。夜も昼もあんまり、差はなかったと感じだっただと思います。(…省略)大きい声でそういう風に拒否的に声を荒げていたり。あとは、術後も麻痺はなかったので、振り払うような、手を挙げるような行動も見られました。(B氏)

このヴァリエーションは、患者は脳梗塞の術後、後遺症により何をするにも誰に対しても常に怒りの感情が高ぶり、看護師に対してその感情をぶつける様子を見せる一例である。このように、患者は脳血管疾患の後遺症により、怒りの感情をあらわにすると看護師は感じていた。

⑤ 概念：[もどかしい思い]

この概念の定義は、「患者が失語症により発語できないことへのはがゆさを、看護師にぶつけると感じること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

脳梗塞で失語症が出てしまって右側に麻痺があった状態で、運動性の失語によって言葉があまり出にくくて、急な発症だったので中々病気が受け入れられないというか。なんで喋れないだろう、伝わらないってことに結構イライラしている感じが見られて、ご家族に当たってしまったり看護師とかにも強く当たられているのが見られている患者さんだっただと思います。(…省略)喋れないので、何て言うんだろう、喋ろうとしても多分言えないことでイライラしちゃうというか。言葉に発っしているというか態度に出しちゃうという。(F氏)

このヴァリエーションは、患者は失語症により思うように思いを伝えられないはがゆさを看護師にぶつける一例である。このように患者は、脳血管疾患の後遺症により、もどかしい思いを抱いていると看護師は感じていた。

(1) 概念間の関係

この5概念は、看護師が認識している、回復期脳血管疾患患者が失語症や麻痺などの後遺症により生じる心理的プロセスであり、それぞれの概念は相互に影響し合う関係である。これら心理的プロセスにより、患者はリハビリテーションに消極的であると看護師は感じていた。

2) カテゴリー【患者との関係が行き詰まる】

このカテゴリーは、看護師は患者との関わりに抵抗感を抱き、患者と関係性を構築する方策がなく先へ進めないことを意味する。このカテゴリーは1サブカテゴリーと、4概念から成り立つ。

(1) サブカテゴリー<後遺症により患者とのコミュニケーションが困難>

このサブカテゴリーは、患者との関わりが裏目に出ることで看護師のこころが挫け、患者との関わりに抵抗感を抱くことで患者とのコミュニケーションが困難になることを意味している。このサブカテゴリーは、4概念から成り立つ。

① 概念：[こころが挫ける]

この概念の定義は、「患者との関係が上手くいかず、患者との関係に消極的な感情を抱くこと。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

その患者さんに関わるのが抵抗あったりとか、何言っても怒られるんでいいんですとか。そういった気持ちがかかなり強くなっていったところで(…省略)今までは行きにくかったんですよね、今まで。怒られるし、怒鳴られるし。(B氏)

このヴァリエーションは、看護師は患者と関わる努力をするが、どのような関わり方をしても患者が怒りの感情を表出するため、看護師が患者との関係構築に対する意欲を失う一例である。このように看護師は、脳血管疾患患者との関わりに対し、こころが挫けていた。

② 概念：[打っても響かない]

この概念の定義は、「患者と関係を築くために患者に働きかけても、何の反応も得られないこと。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

本当に最初は話さないし、何を聞いてももう返事をしなかったり、一言だけ返したりっという風な感じだったんですよね。なので病気で、こういう障害が残ってしまったことを受容できていなくてふさぎ込んでいるのか、それとも男性でまだ若いのであんまり口数が多い人じゃないのか本当に不透明で分からなかった。皆さん、ちょっと困っていた部分もあって。私自身も話しかけても何も返ってこないし、非常に分かりにくかった。それがやっぱり、患者さんがわかった。もーのすごく明るいし、もーのすごくしゃべるし。

(A 氏)

このヴァリエーションは、看護師は患者と関係を築くために患者とコミュニケーションを図ろうとするが、看護師が話しかけても返答がなく、看護師が思うような反応が得られない一例である。このように看護師は、患者と関係を築くために働きかけても、何の反応も得られず打っても響かないと感じていた。

③ 概念：[関わりが裏目に出る]

この概念の定義は、「患者に対する関わりが、反って患者を怒らせてしまうこと。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

看護師がこう何かお手伝いをしたりとか、身体を動かそうとするとそれがきっかけに怒り出してしまったり、制止がきかなくてベッドから降りて一人で歩こうとしてしまったりとか。夜も昼もあんまり、差はなかったと感じだったと思います。大きい声でそういう風に拒否的に声を荒げていたり。あとは、術後も麻痺はなかったので、振り払うような、手を上げるような行動も見られました。(B 氏)

このヴァリエーションは、看護師は患者が回復できるよう積極的に働きかけるが、患者を反って怒らせてしまったり、リハビリテーションに対する更なる拒絶反応をみせたりする一例である。このように看護師は、患者への関わりが裏目に出ていた。

④ 概念：[為す術無し]

この概念の定義は、「患者と良好な関係を構築する方法がなく、どうすることもできないこと。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

患者さん…。患者さん、自分たちがもうお手上げだったりとか、もう何言っても無理だよねって言ったときに、まあリハビリも撤退して、自分たちもまあ例えばじゃあ落ち着くような薬に頼ったりだとか、本当に安全が確保できない時に身体抑制とかになりがち。

(B氏)

このヴァリエーションは、看護師の患者への関わりが裏目にでることで、看護師は患者に対し抵抗感や諦めを抱き、患者と関係を構築するための方策がない一例である。このように看護師は、患者との関係性構築において為す術が無い。

(1) サブカテゴリー、概念間の関係

看護師は患者が回復できるよう積極的に働きかけるが、患者を反って怒らせてしまったり、リハビリテーションに対する更なる拒絶反応をみせたりと、[関わりが裏目に出る]。また患者と関係を築くために患者に働きかけても、何の反応も得られずと[打っても響かない]。それらのことで看護師は[こころが挫け]、患者との関わりに抵抗感を抱き、関係性構築において[為す術無く]、患者の<後遺症により患者とのコミュニケーションが困難>となる。以上より、これら4つの概念は相互に影響し合いながら、患者との関係が悪循環に陥る。

3) カテゴリー【患者のドッグセラピー適合の可否を評価】

このカテゴリーは、ドッグセラピーが患者にとってふさわしいかどうか判断することを意味する。このカテゴリーは、1サブカテゴリーと1概念で成り立つ。

(1) サブカテゴリー<現状を打破する糸口>

このサブカテゴリーは、患者との関係を構築するための方策がない現状を解決するために、ドッグセラピーを突破口として活用することを意味している。このサブカテゴリーは1概念で成り立つ。

① 概念：[セラピー適合の可否を評価]

この概念の定義は、「患者の犬の好みや犬飼育歴について患者本人や家族に確認し、ドッグセラピーの適用を判断すること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

やっぱり嫌いな人もいないですか。嫌いな人もいるし、アレルギーがある方もいらっしゃるし苦手な方もいらっしゃるので、入院の時にご家族に聞くんですね。こういう取り組みがあるんですけど、参加されますかっていって。ご本人がもともとわんちゃんが好きだったりしたら、是非って感じで勧めたりもしますし、あの～、家族も結構よっぽど嫌いとかじゃなかったらそういうのに参加したいって方は多いので、入院の時には家族には同意を得ています。同意書を作成しているので、その同意書を書いていただいて、アレルギーが無いこととかこちらでどんな風なことに気を付けていくのかを説明させてもらって参加させていただくんですけど。ご本人自体には、その日のその気分とかあるので当日に今日ドッグセラピーがあるので参加してよいですかってそれぞれに確認して参加していただくんですけど。この方に関しては、ご本人の反応があまりない方なので、行きますねっていう声かけだけはして参加してもらったって感じですね。(D氏)

このヴァリエーションは、看護師は患者の入院時に患者や患者家族に、ドッグセラピーの参加の有無、犬のアレルギーの有無、犬の好き嫌い等を確認し、同意書を取得した上で患者がドッグセラピーに参加するよう体制を整えている一例である。このように看護師は、ドッグセラピーを実施する前には、患者のドッグセラピー適合の有無について評価していた。

4) カテゴリー【ドッグセラピーを実施する】

このカテゴリーは、患者の心理状況を良い方向に変化させるために、患者にドッグセラピーを実施することを意味している。このカテゴリーは、3 概念で成り立つ。

① 概念：[物は試し]

この概念の定義は、「ドッグセラピーによる患者の反応は定かでないが、実施してみる価値があると考え試行すること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

で、やっぱりお部屋の個室の中で過ごすっていうことが限界で、どうにかリハビリに連れていきたいなあってところで、リハビリとドッグセラピーの人たちと相談して一度試しにやってみようかっていうところでお勧めして実施したということなんですけど。で、犬を飼ってたとかっていう明確な情報は、自分は把握はしていなかったんですけど、なんか本人の口から、犬～犬～っていうことがあったので、ドッグセラピーが良いのかなってとこ

ろで。一度わんちゃんに会ってみませんか？と、一度リハビリのスタッフと病棟の看護師、自分とドッグセラピーの会場に連れて行って。(B氏)

このヴァリエーションは、看護師は患者へのドッグセラピーの効果は定かではないが、患者本人から犬というキーワードが聞かれ、ドッグセラピーが患者に良い影響与える可能性があるのではないかと考え、ドッグセラピーを試験的に実施する一例である。このように看護師は、患者の反応は定かではないが、物は試しとして患者にドッグセラピーを実施していた。

② 概念：[感情へのアプローチ]

このカテゴリーの概念は、「患者の感情が良い方向に変化することを目的に、ドッグセラピーを実施すること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

やっぱりリハビリをする中で、中々リハビリを意欲的にできなかったりだとか、言語リハの方もあまり進んでいなくてっていう状況がありまして。で、元々わんちゃんを飼っていた情報があったので、触れられることで少し気持ちの変化があるのかなっていうところで介入した方が良いんじゃないかなっていうところだと思うんですけども。(F氏)

このヴァリエーションは、患者は失語症によりもどかしい思いを抱き、意欲的にリハビリテーションに取り組むことができないため、看護師はセラピードッグとの触れ合いにより患者の気持ちが少しでも癒されるのではないかと考え、患者にドッグセラピーを実施する一例である。このように看護師は、患者の感情へのアプローチを目的としドッグセラピーを実施していた。

③ 概念：[チームで関わる]

このカテゴリーの概念は、「多職種間で連携しながらドッグセラピーを患者に実施すること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

こういう風にうちはチームになって、動物介在療法のチームのようにスタッフが決まっ
ていて、あの一大々的にやっているんですけども。他のやつは、場面、場面で病棟とか

リハビリで個々に相談して実施するっていう。チームでっていうのはこれだけですかね。
(…省略)対象の患者さんを決めて、書類を作ってそれを実施するために色んな視点で揉んでいくって時はリハビリがいたり医師がいたり、病棟のスタッフがいたりしている。

(B氏)

このヴァリエーションは、看護師はドッグセラピーを実施する際、リハビリテーションのセラピストや医師などと連携を図りながら、チーム一丸となり患者にドッグセラピーを実施する一例である。このように看護師は、多職種間で連携を図りながらチームでドッグセラピーを実施し患者に関わっていた。

(1) 概念間の関係

患者との関係が行き詰まる現状を打破するために、看護師は患者の反応は定かではないが実施してみる価値があると考え、[物は試し]にドッグセラピーを試みる。またその目的は、後遺症によりリハビリテーションに積極的になれない患者の[感情へのアプローチ]を目的としている。その目的を達成するために、病院により異なるが、看護師は多職種間で連携を図りながら[チームで関わる]。このように、これら3つの概念は相互に影響し合いながら、ドッグセラピーの実施に至る。

5) カテゴリー【まるで別人】

このカテゴリーは、セラピードッグとの触れ合いにより患者が日頃見せない表情や反応を表出し、看護師が衝撃を覚えることを意味している。このカテゴリーは1サブカテゴリー、3概念で成り立つ。

(1) サブカテゴリー<患者に意欲の灯がともる>

このサブカテゴリーは、後遺症によりリハビリテーションに意欲的になれない患者が、セラピードッグとの触れ合いにより、これまで頑であったところが癒され、回復に向けやる気が引き出されることを意味する。このサブカテゴリーは3概念で成り立つ。

① 概念：[こころ解ける]

この概念の定義は、「セラピードッグとの関わりにより、患者が他者に対し怒りや拒否反応を見せなくなると感じること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

実際にわんちゃんがいる時間は全然怒ったりとか声を荒げたりする全然なくって、本当に穏やかに犬を撫でたりとか。後は、ハンドラーさんが1回このボールを投げてみて下さいとかっていう促しにも、全然拒否なく投げてくれたりという感じだったと思います。

(B氏)

このヴァリエーションは、看護師がどのような関わりをしても後遺症により怒りや拒否反応を示す患者が、セラピードッグとの触れ合いでは、怒りや拒否反応を見せず、また医療従事者の促しを拒否無く受け入れる一例である。このように看護師は、セラピードッグとの触れ合いにより患者のこころが解け、怒りや拒否反応を見せなかったと感じた。

② 概念：[意思が芽生える]

この概念の定義は、「セラピードッグとの関わりにより、患者が自らの意思で行動するようになると感じること。」以下にヴァリエーションの一例を載せる。

私とか他のスタッフが話しかけても、あまり何も反応が返ってこなかったりされていた方で、何かに意識がいたりっていう感覚があまりないと思っていたんですけど、わんちゃんを抱っこして撫でるって姿を見たときに、あ、この人こんなことしはるんや出来るんやって、多分思ったと思うんですね。なので、それは印象に、それは普段何か動作を自分でしようって思うことがなかったと思うんですね。そこをそういう風にしてはるから、いつも見られないことなので多分印象に残っているっていうの。(G氏)

このヴァリエーションは、後遺症により無気力や無関心のために自発的に何かをすることがない患者が、セラピードッグとの触れ合いにより、患者自らセラピードッグを抱っこしたり撫でたりする一例である。このように看護師は、患者はセラピードッグとの触れ合いにより、意思が芽生え自発的に動作をすると感じていた。

③ 概念：[笑顔ほころぶ]

この概念の定義は、「セラピードッグとの関わりにより、それまで固かった患者の表情に笑顔がうまれると覚えること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

ドッグセラピーでこんな笑ってたんだよとか、こんな穏やかな表情をスタッフ達も写真
みたりとかすると、その患者さんに写真を実際にそれを見せてこういう一面もあるんじゃ
ん、とかっていうのをこう話すと、なんかスタッフ達が患者さんを見る目が変わったんだ
なっていう風に感じました。(B氏)

このヴァリエーションは、脳梗塞の後遺症である易怒性により、常に怒りの感情を表出する患者が、セラピードッグとの触れ合いにより、これまで固かった患者の表情が緩み笑顔や穏やかな表情を見せる一例である。このように、セラピードッグとの関わりにより、患者の表情に笑顔がほころんだと看護師は感じていた。

(2) サブカテゴリーと概念間の関係

患者はセラピードッグと触れ合うことで<ここに意欲の灯がともし>、[こころ解け]、[意思が芽生え]、[笑顔ほころぶ]様子を見せる。このようにこれら3概念は、サブカテゴリーを基点に相互に影響し合う関係である。

6) カテゴリー【もう一度向き合ってみる】

このカテゴリーは、患者の新たな一面を知ることや、関係を構築するための媒介役がでることにより、再び患者と関係性構築を試みようと思えることを意味している。このカテゴリーは2サブカテゴリー、7概念で成り立つ。

(1) サブカテゴリー<抵抗が和らぐ>

このサブカテゴリーは、セラピードッグとの触れ合いにより患者の新たな一面を知ることと看護師のこころが強く揺り動かされ、患者を受け入れがたい気持ちが和らぐことを意味している。このサブカテゴリーは、3概念から成り立つ。

① 概念：[衝撃覚える]

この概念の定義は、「ドッグセラピーで患者が日頃見せない表情や反応を表出し、強く印象に残ること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

実際、そこまですごい楽しみとかそういう感じでは最初はなかったんですけど、そのド
ッグセラピーの会場に行った時点で凄い喜んでいたのでびっくりして。こんなにこう、
喜んでいる姿を日頃見ていなかったの。あと結構、もういい病棟に上がるっていう人多

いんですけれども、そのドッグセラピーの時間を丸々使ってその犬と戯れていたの。
その人の性格上もういいとかっていつも言われる方だったんですけれども、ドッグセラピーの時だけはずーっと居てはったんで。(C氏)

このヴァリエーションは、日頃感情や意欲を見せない患者が、セラピードッグとの触れ合いにより喜びを表出し、また自らの意思でセラピードッグとの触れ合い時間の延長を希望され、看護師が心を揺り動かされるほど驚く一例である。このように看護師は、患者がセラピードッグとの触れ合いにより日頃見せない反応を示し、衝撃を覚えていた。

② 概念：[もう一度向き合ってみる]

この概念の定義は、「ドッグセラピーでの患者の反応により、再び関係性構築を試みようと思えること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

スタッフたちも、その患者さんに関わるのが抵抗あったりとか、何言っても怒られるん
でいいんですとか。そういった気持ちがかなり強くなっていったところで。でも、ドッグ
セラピーでこんな笑ってたんだよとか、こんな穏やかな表情をスタッフ達も写真みたりと
かすると、その患者さんに写真を実際にそれを見せてこういう一面もあるんじゃない、とか
っていうのをこう話すと、なんかスタッフ達が患者さんを見る目が変わったんだなってい
う風に感じました。(…省略)病室に行くのが増えたと思います。今までは行きにくかった
んですよ、今まで。怒られるし、怒鳴られるし。(B氏)

このヴァリエーションは、患者は後遺症により常に怒りの感情を表出するため、看護師は患者との関わりに抵抗感を抱く。しかし、セラピードッグとの触れ合いでの患者が笑う姿や穏やかな一面により、患者に対する見る目が変わり、もう一度患者と関係構築しようと思える一例である。このように看護師は、ドッグセラピーでの患者の反応により、患者ともう一度向き合ってみようと思えていた。

③ 概念：[笑顔の連鎖]

この概念の定義は、「ドッグセラピーで患者が笑顔になると看護師自身の嬉しい感情が芽生え、患者と関わりやすくなること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せ

る。

ドッグセラピーは皆笑顔になりますからね。あの空間自体が何やってなくっても、あの空間自体が良いものなのかなって。一人が笑顔になったら隣の人も笑顔が増えて。スタッフも上では、バタバタしててもその空間にいるときにはゆっくり患者さんとかかわることができるし、患者さん笑顔になっていたらスタッフも笑顔になるし。その笑顔がいっぱいあるとこの空間が、これっていうの(効果)は分からないかもしれないんですけど、それだけで良い影響を与えていると私は思います。(F氏)

このヴァリエーションは、セラピードッグとの触れ合いにより患者が笑顔を見せることで看護師も嬉しい感情が生まれ、患者の笑顔が看護師に連鎖し、看護師は患者に対し親近感を感じられる一例である。このようにドッグセラピーが契機となり、患者の笑顔が看護師に連鎖し、看護師は患者と関わりやすさを感じていた。

(2) サブカテゴリー<関係構築の媒介役ができる>

このサブカテゴリーは、患者がドッグセラピーを受け入れることで、ドッグセラピーという患者との関係を取りもつ存在ができることを意味している。このサブカテゴリーは4概念で成り立つ。

① 概念：[共通の話題ができる]

この概念の定義は、「患者がドッグセラピーを受け入れたことで、患者との共通の話題ができること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

どうしても忙しい、業務内容に追われて追われてしていると、普段ドッグセラピーどうだった？って振り返る時間もないけれど、こんなに嬉しそうに犬と接しているのを見ていたら、次の日だったり、その次の日だったりもその話をしたら、その患者さんの気持ちを引き出せるんじゃないかとか、信頼関係を構築することができるにあたっての手段になるんじゃないかなって思って、その翌日とかに行ってきた患者さんには話すようにしてみましたね。(…省略)ある程度しっかりされていて脳血管障害があったとしても麻痺があるだけで頭の中は正常だったりする患者さんは話す内容を考えたりとかしているんですね。こんなこと聞いていいのかなっていうのがあるんですけども、そのドッグセラピーっていうの

を同じ場所で同じ時間を共有していれば、そんな食い違いのあるコミュニケーションにはならないので。なんか、振り返りとしても良いのかなっていうので、話しやすくはありましたね。 (H 氏)

このヴァリエーションは、ドッグセラピーにより看護師と患者が同じ場所、同じ時間を共有することで、患者と食い違いのない会話ができ、看護師が患者と互いの経験を共有するコミュニケーションを図れることを意味している。このように看護師は、ドッグセラピーにより患者と共通の話題ができていた。

② 概念：[負の感情のなだめ役]

この概念の定義は、「ドッグセラピーの話題を活用し、患者の怒りや不快感情を和らげること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

そこで一つ犬が本当に好きなんだなっていうことが分かったので、これは私本当に覚えておこうって思って。怒ったり、機嫌を少し損ねてしまったときには、時間を置いてそのドッグセラピーの話をしてみたり、犬の話をただ単にしてみたりってことはありました。 (H 氏)

このヴァリエーションは、患者が怒ったり機嫌を損ねたりする反応が見られる際に、看護師はその感情を和らげ気持ちを穏やかにするためにドッグセラピーの話題を活用する一例である。このように看護師は、ドッグセラピーを活用し、患者の負の感情をなだめていた。

③ 概念：[リハビリ意欲の引き立て役]

この概念の定義は、「ドッグセラピーの話題を活用し、患者の意欲を引き立てること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

一回目が終わる時にまた来週も時間があるから、来週もここに来ることを目標にリハビリを頑張って次は歩いてこようねって声かけを、1 回目か 2 回目かちょっと記憶は不確かなんですけれども。次の 1 週間に向けて頑張ろうねって言い続けていて。実施していると

ことの写真を何枚も撮ってくれるので、患者さんにお渡しして記憶が薄れないようにとい
うか。それをベッドサイドに見せながら来週これやるからね～みたいところで、患者さ
んに日々声掛けして翌週を待つみたいな感じです。(B氏)

このヴァリエーションは、患者が意欲的にリハビリテーションに取り組むことができる
よう次の機会までに、看護師はドッグセラピーの話題を活用し、患者を鼓舞する一例であ
る。このように看護師は、患者のリハビリテーションへの意欲を引き立たせるために、ド
ッグセラピーを活用していた。

④ 概念：[感情の引き出し役]

この概念の定義は、「ドッグセラピーの話題を活用し、患者のより詳細な情報を引き出
すこと。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

多分、その犬がいて雑談が入ると聞きたいことが聞けやすくなっているじゃないかなと
いうふうに思うんですけど。今犬こうだねどうしたね、そういえばという風に話があのこ
っち側からは上手くコミュニケーション技法として聞き出したり話題の転換ができたりす
るので、それに伴って、あの患者さんの方も話がしやすくなって、話題も取りやすくなっ
ているのかなという風に思います。(A氏)

このヴァリエーションは、看護師が患者の身体面の情報や現状困っていることを聞き出
すために、患者と一緒にセラピードッグと触れ合いながら、上手く話題を転換すること
で、看護師が聞きたい患者の詳細な情報を収集しつつ患者の感情の表出を促す一例であ
る。このように看護師は、ドッグセラピーを活用し患者の感情を引き出していた。

(2) サブカテゴリーと概念間の関係性

看護師は患者がセラピードッグと触れ合うことで、日頃見せない表情や反応を表出し、
[衝撃を覚える]。また患者が心から喜ぶ様子や患者の笑顔により、看護師自身も嬉しい感
情を抱き[笑顔の連鎖]が起こる。これら心理的プロセスにより、看護師は患者と[もう一
度向き合ってみる]と思えるようになる。また患者がドッグセラピーを受け入れ、良い変化
を見せることで、看護師は患者との[共通の話題ができる]。共通の話題であるドッグセラ

ピーを活用することで、患者の[負の感情のなだめ役]、[リハビリ意欲の引き立て役]、[感情の引き出し役]として活用する。このように患者への<抵抗が和らぎ>、<患者との関係構築の媒介役ができる>ことで、看護師は患者ともう一度向き合えるようになる。

以上より、これら2サブカテゴリーと7概念が相互に影響し合い、看護師はもう一度患者との関係構築に臨んでいた。

7) カテゴリー【関係が軌道に乗り出す】

このカテゴリーは、看護師は患者とコミュニケーションが図れたり、必要に応じて看護介入できたりすることで、患者との関係が順調に進み出すことを意味している。このカテゴリーは、3サブカテゴリー、7概念で成り立つ。

(1) <ケアが受け入れられ始める>

このサブカテゴリーは、看護師がドッグセラピーという関係構築の媒介役を頼りに患者ともう一度向き合うことで、患者との関係が順調に進み出し、患者が徐々に看護ケアを受け入れ始めることを意味している。このサブカテゴリーは4概念で成り立つ。

① 概念：[他者との交わり取り戻す]

この概念の定義は、「ドッグセラピーを契機に、患者が再び他者との関係を築くことができるようになると感じること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

もちろんその、犬を通しての会話が増えたのと、スタッフに色んなスタッフ皆に写真を見せて。自分の飼っている犬の写真を見せたりとかしていくと、まああの言葉では言えませんが、見て見てみたいな感じで見せてくれたりとか。どうしても私たちは(患者の元へ)行ったら体のこと聞いたり、困ったことないかとかっていう話になりがちですけど、ちょっとちょっとみたいに引き止められて、出してきて。相手の方からコミュニケーションを図ってくるようになりました。(E氏)

このヴァリエーションは、ドッグセラピーが契機となり、患者自らが看護師に話題を切り出し、患者自身が飼っているペットの話をするようになる一例である。このように患者は、ドッグセラピーが契機となり他者との交わりを取り戻すことができたと言看護師は感じていた。

② 概念：[心情吐露]

この概念の定義は、「ドッグセラピーを契機に、患者がここを開き自ら思いを伝えるようになると感じる事」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

やっぱり病気に対してこんな風になっちゃってというので、仕事もどうなるか分からな
いし、元通りにはできだろうしという風な社会的な面のことや。あと、家族に対して、息
子さんがいらっしゃってあの息子には迷惑をかけちゃうだとか、こんなふうになったとこ
ろを見られるのは嫌だとか、そういったあの一ボディイメージの変化というか、その辺り
のことを仰るようになってきました。で、犬に関しては、なんだろう、最初はとにかく行って
もいいよーみたいな感じで見ようともせず、話しかけるなんて一切なかったんですけど
も、それが段々見るようになってきたり、一瞬だけこう手がでるような変化から、もうあ
の、やっと来たかとか待ってたよとかという風な言葉に変わっていった。で、こっちが誘
導しなくても自分から動かそうとして、手が出るようになっていったり、最初は犬なんて
と思っていたけど、こんなにも支えられるとは思わなかったっていう風なこととかは、最
後にあの聞かれたという風な内容ですかね、具体的には。(A氏)

このヴァリエーションは、患者は後遺症により無気力且つところを閉ざしているため
に、看護師からの問いかけにも反応を示さないが、ドッグセラピーが契機となり、患者が
ここを開き自ら胸の内を明かすようになり、病気に対する思いやセラピードッグに対す
る思い、また今後の心配事について看護師に思いを伝える一例である。このように患者
は、ドッグセラピーが契機となり、心情を吐露するようになったと看護師は感じていた。

③ 概念：[病気と向き合い始める]

この概念の定義は、「ドッグセラピーが契機となり、患者の病気の受け入れが少しずつ
進むこと。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

もともとぎつと穏やかな人だと思うんですけど、家族の話だと。けど喋れないとか思い
が伝わらないってことで、イライラしたりとかされることが多かったと思うんですけど。
犬に関わったことがきっかけでちょっと言語リハとかもしっかり受けれるようになってく
ると、少しずつですけど自分の中で喋る方法とか伝わる方法が分かってきて、少しずつ自

分の中で獲得したというか伝え方を。(…省略)わんちゃんを通して喋ってることが多くなったりとか、その時の表情が和らいだりとかですね。(F氏)

このヴァリエーションは、ドッグセラピーが契機となり、失語症の患者がリハビリテーションの意欲を取り戻し、他者との関わりを取り戻しながら少しずつ病気と向き合い、喋る方法や相手への伝え方を獲得し、セラピードッグを通じて会話が増える一例である。このように患者は、ドッグセラピーが契機となり、病気と向き合うようになった。

④ 概念：[ケアを受容し始める]

この定義は、「ドッグセラピーを契機に、患者が看護師にケアされることを受け入れ始めること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

多分、そういうのが増えていって、最初はほとんどベッド上、そこからまあ部屋の中で大きい声を出していてってというのが、多分最後は、独歩にはならなかったかもしれないんですけども、普通に看護師と廊下を穏やかに歩いてたりとか、トイレに歩いて付き添いで行ったりとかっていう風になっていったと思うんで。ドッグセラピーだけじゃないかもしれないんですけど、でもスタッフ達もそういう風に寄り添いやすくなって離床が進んで、日常生活でちょっと近くなり退院に向かったのかなっていう。(B氏)

このヴァリエーションは、後遺症により常に怒りの感情を表出し、看護師にケアされることを拒否している患者が、ドッグセラピーを契機に看護師のケアを受け入れるようになり、最終的には離床のために看護師と歩行訓練できるようになる一例である。このように患者は、ドッグセラピーを契機に看護師のケアを受け入れるようになった。

(2) サブカテゴリー<コミュニケーションが捗る>

このサブカテゴリーは、看護師がドッグセラピーという関係構築の媒介役を頼りに患者ともう一度向き合うことで、患者との関係が軌道に乗り出し、順調に患者とコミュニケーションを図ることができることを意味している。このサブカテゴリーは2概念で成り立つ。

① 概念：[意図することが分かるようになる]

この概念の定義は、「患者が反応を示すことにより、患者が伝えたいことが分かるよう

になること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

やっぱり、患者さんの気持ちとかが分かりにくいっていうのはあるのかなって思うんですけど、少しでも話してくれることで今の表情とかで色んな思いを汲み取るってのもわかりやすくなるのかな。怒っているとそういうところが見えづらかったりとか、関わろうって思う気持ちも私たちも少なくなってくるので、そういった面では少しく緩んだ時とかリラックスされていて体調が良い時の方が患者さんを観察しやすいのかなって思います。

(F 氏)

このヴァリエーションは、患者がドッグセラピーを契機にここを開き始め何かしらの反応を示すようになることで、看護師は患者の表情や会話の中から患者の思いを汲み取ることができるようになる一例である。このように看護師は、ドッグセラピーを契機に患者が反応を示すことで、患者が意図することが分かるようになった。

② 概念：[こころの距離が近くなる]

この概念は、「患者との間にあった隔たりがなくなり、患者に寄り添いやすくなること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

多分、そういうのが増えていって、最初はほとんどベッド上、そこからまあ部屋の中で大きい声を出していてっていうのが、多分最後は、独歩にはならなかったかもしれないんですけども、普通に看護師と廊下を穏やかに歩いてたりとか、トイレに歩いて付き添いで行ったりとかっていう風になっていったと思うんで。ドッグセラピーだけじゃないかもしれないんですけど、でもスタッフ達もそういう風に寄り添いやすくなって離床が進んで、日常生活でちょっと近くなり退院に向かったのかなっていう。(B 氏)

このヴァリエーションは、ドッグセラピーを契機に患者が穏やかになることで、患者に対する抵抗感が和らぎ、患者に寄り添いやすさを感じる一例である。このように看護師はドッグセラピーが契機となり、患者とのこころの距離が近くなっていた。

(3) サブカテゴリー<タイムリーに介入できる>

このサブカテゴリーは、看護師が患者と関係性が構築できることで、患者の必要に応じて看護師が看護介入できることを意味している。このサブカテゴリーは1概念で成り立つ。

① 概念：[タイムリーな介入]

この概念は、「患者が看護師を受け入れ始め、患者の必要に応じて看護介入ができること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

うーん、日常生活のお手伝いをするときに、あの一、多分排泄の誘導だったり歩行の練習だったりとかっていうところも、声をかけやすくなったりっていうとか、訪室頻度が多くなったりした。時間を要したりするとその患者さんの部屋に行くと怒られて、でもこれをやらないといけないからどんだんだんだん後回しだったりとか。時間が確保できるとき、人が確保できるときっていうところだったと思うんですけども。少しこう行きやすくなったことで、タイムリーに訪室して声をかけられたりとか、車いす乗りませんかっていうことを躊躇なく声をかけられたりってところですかね。(B氏)

このヴァリエーションは、患者が怒りの感情を表出したり拒否するために、患者のケアが必要以上に時間を要したり人員確保が必要であったりすることで、看護師は患者との関わりが億劫になりケアが後回しになる。しかし、ドッグセラピーを契機に、患者が看護師のケアを受け入れ始めることで、看護師は患者の必要に応じて看護介入できる一例である。このように看護師は、ドッグセラピーが契機となり、患者の必要に応じてタイムリーに介入することができた。

(4) サブカテゴリーと概念間の関係性

看護師はドッグセラピーという媒介役を頼りに、もう一度患者との関係構築に臨む。そのことで患者は、[他者との交わりを取り戻し]、他者と関わる中で徐々にこころを開き始め、[心情を吐露]し[病気と向き合い始め]、次第に患者は看護師の[ケアを受容し始める]。看護師は患者に<ケアを受け入れられ始める>ことで、患者の反応が見え[意図することが分かる]ようになる。それにより、患者との間にあった隔たりが希薄になり、看護師は患者との[こころの距離が近くなる]ことで、次第に患者との<コミュニケーションが捗り

>、患者の必要に応じて<[タイムリーな介入]ができる>ようになる。

以上より、7 概念と 3 サブカテゴリーが相互に影響し合う関係により、患者と看護師との関係が軌道に乗り始める。

8) カテゴリー【病床前の患者の姿を思い描く】

このカテゴリーは、看護師が患者に思いを馳せ、看護師が知らない入院前の患者の姿について考えることを意味している。このカテゴリーは 1 サブカテゴリー、1 概念で成り立つ。

(1) サブカテゴリー <患者に思いを馳せる>

このサブカテゴリーは、看護師が知らない患者が入院する前の姿について看護師が思いを巡らせることを意味している。このサブカテゴリーは 1 概念から成り立つ。

① 概念：[本来の姿とは]

この概念の定義は、「患者との関係が軌道に乗り出し、看護師が知らない入院前の患者について考えること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

この患者さんが穏やかだっというのは分からなかった面なので、そういうところは本当の患者さんはこういうところだったんだな。変わっていった変化の中で、今までの患者さんはこういう方だったのかなって。(…省略)その方を知ったことで、より深い関わりというかができてきたのかなと思います。どういう風に感じているのかなって患者さんのことを考えたりもすると思うんですけど、穏やかな日が増えてるってこともあって、体調も整ってきたっていうのもありますし、そういうところから関わりが増えていったって事実かなって思います。(F 氏)

このヴァリエーションは、患者との関係が軌道に乗り出し患者との距離が近くなることで、看護師の知らない患者が入院する前の姿について考える一例である。このように看護師は、ドッグセラピーが契機となり患者との関係が軌道に乗り出したことで、患者の本来の姿について考えていた。

9) カテゴリー【患者にとってはかけがえのない存在】

このカテゴリーは、患者との関係が軌道に乗り出し、患者に思いを馳せることで、患者

目線でセラピードッグの存在意義を捉え、それは患者にとってかけがえのない存在であると気づくことを意味している。このカテゴリーは1サブカテゴリー、3概念から成り立つ。

(1) サブカテゴリー<患者目線でセラピードッグの存在意義を捉える>

このサブカテゴリーは、患者の立場に立ち、患者にとってのセラピードッグの存在意義を考えることを意味している。このサブカテゴリーは3概念から成り立つ。

① 概念：[家族のような存在]

この概念の定義は、「患者にとってセラピードッグは、家族のような存在であると感じること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

やっぱ動物って、自分は苦手ですけど、好きな人っていいのは本当家族みたいになっていうのは聞くので、やっぱり患者さんにとってわんちゃんが凄い良い効果を与えるっていうのは、なんかその場面で凄い実感したんですね。(B氏)

このヴァリエーションは、看護師自身犬は苦手であり、看護師にとってセラピードッグの存在は単なる犬であるが、ドッグセラピーによる患者の良い変化を感じ患者との関係が軌道に乗り出すことで、患者にとってセラピードッグは家族のような存在であると、患者目線でセラピードッグの存在意義を捉えられるようになる一例である。このように看護師は、患者にとってセラピードッグは家族のような存在であると感じていた。

② 概念：[ありのままでいれる存在]

この概念の定義は、「患者にとってセラピードッグは、無条件に認めてくれる存在であると感じること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

そういう可愛らしい、凄く犬って向こうからやってきてくれるし、何もこう考えずにこう可愛いーってやってあげられるし、寄ってきてくれるしっていう意味で、なんかこう癒す力あるんじゃないかなと思います。(…省略)やっぱり、人対人だったら、こんなこと言っていていいかなとか、大体色んなこと考えるじゃないですか。今日もそうですけど、どんなこと聞かれるのかな大丈夫かなとか。でも、動物とかだったら犬とかは垣根が結構ないような感じがするんですね。動物の中でも実は私は猫派なんですけど。猫とかだったら、や

っぱり行ってしまうとか引っ掻かれるかもとかちょっと気を付けてとか、来てくれるかな
どうかなとか、他の動物とかもそうですけど。(E氏)

このヴァリエーションは、患者は対人の時とは異なり、セラピードッグが相手であれば、
患者は遠慮したり相手の反応を伺ったりする必要がなく、患者のありのままで接すること
ができると感じている一例である。このように看護師は、セラピードッグは患者にとって
ありのままでいられる存在であると認識していた。

③ 概念：[かつての自分を取り戻せる場]

この概念の定義は、「患者にとってのドッグセラピーの場は、これまでの自分を思い出
せる環境であると感じること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

家で犬とかペットとか飼っている人には、入院生活する中で自宅での生活を取り戻せる
ような環境にちょっと戻って、感覚的に戻る、一瞬戻れる時なのかなとか。ペット飼って
なくても、動物好きやったり、ちょっと鳴き声を聞くだけでも癒される癒し効果とかある
のかなと思います。(C氏)

このヴァリエーションは、犬飼育歴がある患者にとってドッグセラピーの場は、入院前
の自宅での生活を一時的に取り戻せる環境であると看護師が感じている一例である。この
ように看護師は、患者にとってドッグセラピーの場は、かつての自分を取り戻せる場であ
ると認識していた。

(2) サブカテゴリーと概念間の関係性

看護師と患者との関係が軌道に乗り出すことで、看護師は患者に思いを馳せ、<患者目
線でセラピードッグの存在意義を捉える>ようになる。その存在は患者にとって[家族のよ
うな存在]であり、また無条件に患者を認めてくれることから、[ありのままでいれる存在]
であるとも感じる。これら存在により、ドッグセラピーの場は、患者がこれまでの生活を
思い出せる環境であり、[かつての自分を取り戻せる場]であると気づく。このように、サ
ブカテゴリーを基点に、3つの概念は相互に影響し合う。

10) カテゴリー【患者が病気と共に生きていくことができる礎となる】

このカテゴリーは、ドッグセラピーを契機に看護師と患者との関係が軌道に乗り出すことで、看護ケアが発展し、患者が病気と共に生きていくことができるまでに回復することを意味する。このカテゴリーは、1サブカテゴリー、4概念で成り立つ。

(1) サブカテゴリー<互いに満足のいく関係>

このサブカテゴリーは、看護師はドッグセラピーを契機に患者理解が深まり、患者への看護ケアが発展し、ケアに対する達成感を抱くことができる。また患者は看護ケアが発展することで、病気と共に生きていくことができるまでに回復し、看護師と患者との関係が互いに満足のいくものに変化することを意味している。このサブカテゴリーは、4概念で成り立つ。

① 概念：[もう一度自分らしく生きる]

この概念の定義は、「患者がもともとの自分らしさを取り戻し生きていけると感じること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

本当に最初は話さない。し、何を聞いてももう返事をしなかったり、一言だけ返したりっていう風な感じだったんですね。なので病気で、こういう障害が残ってしまったことを受容できていなくてふさぎ込んでいるのか、それとも男性でまだ若いのであんまり口数が多い人じゃないのか本当に不透明で分からなかった。皆さん、ちょっと困っていた部分もあって。私自身も話しかけても何も返ってこないし、非常に分かりにくかった。それがやっぱり、患者さんがわかった。もーのすごく明るいし、もーのすごくしゃべるし。

(A氏)

このヴァリエーションは、ドッグセラピーが契機となり、患者がこころを開いたりリハビリテーションに意欲的になったりすることで自発的にコミュニケーションを図る姿が見られ、入院前のかつての患者の様子である明るさや良く喋る姿がみられる一例である。このように患者はドッグセラピーが契機となり、もともとの自分らしさを取り戻し、もう一度自分らしく生きていけるようになったと看護師は感じていた。

② 概念：[障害を乗り越える]

この概念の定義は、「患者が後遺症により話しにくさがあるも、言葉で示す努力をする

と感ずること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

もともときつと穏やかな人だと思ふんですけど、家族の話だと。けど喋れないとか思ふが伝わらないってことで、イライラしたりとかされることが多かったと思ふんですけど。
犬と関わったことがきっかけでちょっと言語リハとかもしっかり受けれるようになってくると、少しずつですけど自分の中で喋る方法とか伝わる方法が分かってきて、少しずつ自分の中で獲得したというか伝え方を。(…省略)わんちゃんを通して喋ってることが多くなったりとか、その時の表情が和らいだりとかですね。(F氏)

このヴァリエーションは、患者は失語症を受け入れられずにいるが、ドッグセラピーを契機にリハビリテーションに意欲的に取り組むことができ、ドッグセラピーを通して他者との会話が増えることで、徐々に話し方や相手に伝える方法を習得することができる一例である。このように患者は、ドッグセラピーが契機となり、障害を乗り越え話す方法を習得することができたと看護師は感じていた。

③ 概念：[想像以上に離床が進む]

この概念の定義は、「看護師が想像していた以上に患者の心身の機能が向上すること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

多分、そういうのが増えていって、最初はほとんどベッド上、そこからまあ部屋の中で大きい声を出して歩いていってというのが、多分最後は、独歩にはならなかったかもしれないんですけど、普通に看護師と廊下を穏やかに歩いてたりとか、トイレに歩いて付き添いで行ったりとかっていう風になっていったと思ふんで。ドッグセラピーだけじゃないかもしれないんですけど、でもスタッフ達もそういう風に寄り添いやすくなって離床が進んで、日常生活でちょっと近くなり退院に向かったのかなっていう。(…省略)家に帰れるのかどうかっていうところはほとんどのスタッフは難しいんじゃないかなって思っていたと思ふんですね。やっぱり、こんだけすぐ怒ってしまったりとか、多分、多分、結構高齢な奥さんと暮らしていた方だった気がするんで、奥さんのところに帰ったところで制止もできないし、っていうところが。あの一、これだけリハビリが進み、離床も進んで、そんなにこう怒ったりすんじゃないければ、自宅に帰るっていう方向で進めても良いのかな、って

う風に切り替えられたのは大きく変わったところだと思います。(B氏)

このヴァリエーションは、ドッグセラピーを契機に患者がリハビリテーションに意欲的に取り組むことができるようになり、看護師が想像している以上に患者の離床が進み、看護師の選択肢にはなかった、在宅復帰ができた一例である。このように患者は、ドッグセラピーが契機となり、看護師の想像以上に離床が進み在宅へ退院することができた。

④ 概念：[やっぱり良かった]

この概念の定義は、「患者の心身の回復に、ドッグセラピーが良い影響を及ぼしている」と改めて実感すること。」である。以下にヴァリエーションの一例を載せる。

集中力っていうのも確かにこうあの、PTさんから言われたんですかね。前よりもずっとやれる集中力したりとか、やろうとする意欲だったりとか上がっているっていう。集中力、意欲っていうのは言われました。看護のあの、NANDAの方でも評価していますけど、集中力っていうところは、看護問題の方でも上がっていたので、そういったところでは影響しているのかなという風に捉えています。(…省略)アニマルセラピー中じゃなくてもそれ以外にも影響が出ていて、皆がそう捉えていたって。すごくそうなんじゃないかなって。(A氏)

このヴァリエーションは、ドッグセラピーを契機に患者のリハビリテーションへの集中力や意欲が向上していることを、他医療従事者からも報告を受け、改めて患者の心身の回復に良い影響があると改めて感じている一例である。このように看護師は、患者の心身の回復にドッグセラピーが良い影響を及ぼすと改めて感じていた。

(2) サブカテゴリーと概念間の関係性

看護師の患者理解が深まり看護ケアが向上することで、ケアの目標が定まったり、患者を尊重したりすることができ、患者は、看護師の[想像以上に離床が進む]までに回復する。また失語症の患者は、看護ケアが向上する中で、話しにくさはあるものの相手への伝え方を習得し、[障害を乗り越える]ようになる。このように患者は回復することで、もとの自分らしさを取り戻し、[もう一度自分らしく生きる]ことができるようになる。そ

のことで看護師は、ドッグセラピーは[やっぱり良かった]のだと、患者の心身に良い影響を及ぼしていると改めて実感する。これにより、看護師と患者が<互いに満足のいく関係>へと変化していく。以上から、4つの概念が相互に影響し合い、看護師と患者の関係が互いに満足のいく関係へと変化する。

6. カテゴリーの関連について

1) カテゴリー間の関連性

(1) 【患者との関係が行き詰まる】 【リハビリテーションに消極的】 【患者のドッグセラピー適合の可否を評価】 【ドッグセラピーを実施】 【まるで別人】

これら5つのカテゴリーは、リハビリテーションに消極的である患者が、ドッグセラピーにより、これまでとは別人のように笑ったり意欲的になったりする変化を看護師が認識するプロセスである。患者は失語症や麻痺などの後遺症により、【リハビリテーションに消極的】であるため、看護師は患者が回復できるよう積極的に働きかける。しかし、その関わりが裏目に出るため、こころが挫け、患者との関わりに抵抗感を抱き、患者とコミュニケーションを図れずに【患者との関係が行き詰まる】。これら両者の相互作用により、患者と看護師の関係はさらに悪循環を生みだし、看護師は患者との関係において為す術がなくなる。しかし、現状を打破するために、【患者のドッグセラピー適合の可否を評価】した上で、【ドッグセラピーを実施】する。すると患者は、セラピードッグとの触れ合いにより、こころに意欲の灯がとまり、【まるで別人】のように変化を見せるようになる。

今後のプロセスにおいて、看護師が【まるで別人】という患者の変化の認識を強く持つことが重要になるが、それには【患者との関係が行き詰まる】ことや【リハビリテーションに消極的】であることを、より濃く経験していることが影響を及ぼしている。この経験が希薄であれば、この後に続いていくプロセスが最後まで到達することが難しくなる。

(2) 【もう一度向き合ってみる】 【関係が軌道に乗り出す】 【病床前の患者の姿を思い描く】 【患者にとってはかけがえのない存在】

これら4つのカテゴリーは、上記(1)のプロセスを経て、看護師が患者ともう一度向き合うことで関係が軌道に乗り出し、患者に対する理解を徐々に深めていくプロセスである。

患者がセラピードッグと触れ合うことにより、看護師は患者の新たな一面に衝撃を覚え患者への抵抗感が和らぎ、【もう一度向き合ってみる】と思えるようになる。またドッグ

セラピーという関係構築の媒介役を頼りに関わりを持つことで、次第に患者との【関係が軌道に乗り出す】。そのことで看護師は、患者に思いを馳せるようになる。患者に思いを馳せる中で、看護師は二つの大きな気づきを得る。一つ目は、看護師が知らない患者の姿である、【病床前の患者の姿を思い描く】。また二つ目は患者目線でセラピードッグの存在意義を捉え、【患者にとってはかけがえのない存在】であると気づくことである。一つ目の病床前の患者の姿を思い描くことは、【まるで別人】のように患者の変化に衝撃を覚えることが影響している。またセラピードッグが【患者にとってはかけがえのない存在】であるからこそ、患者が【まるで別人】のように変化する要因になることに気づき、看護師の認識が反復するようになる。そのことで看護師は、【まるで別人】を基点とし認識が反復することで、次第に【病床前の患者の姿を思い描く】と【患者にとってはかけがえのない存在】が相互に影響し始める。

(3) 【患者理解ががらりと変わる】 【看護ケアに対する達成感を抱く】 【自己の看護を振り返る】 【その人がその人らしく】

これら 4 つのカテゴリーは、上記(1)(2)のプロセスを経て、看護師の内省が促されるプロセスである。

看護師は、【病床前の患者の姿を思い描く】と【患者にとってはかけがえのない存在】の気づきを得ることで、患者に貼っていたレッテルが剥がれ【患者理解ががらりと変わる】。患者理解が大きく変化することで、看護ケアが発展し、【ケアに対する達成感を抱く】。これら 2 つの認識の変化が相互に影響することで、徐々に看護師自身に目が向けられ、【自己の看護を振り返る】きっかけとなる。これにより、看護師の患者理解が深まり、看護ケアに対する達成感をより一層に感じ、3 つの認識【患者理解ががらりと変わる】、【看護ケアに対する達成感を抱く】、【自己の看護を振り返る】が相互に動き始める。これら 3 つを経て、看護師は病床前の患者の姿や患者にとってはかけがえのない存在であるセラピードッグについて、改めて深く考えることとなる。看護師はこれら内省を経て、患者にとって【その人がその人らしく】生きていけるよう支援をしていきたいと、看護における信念を抱く。

(4) 【看護ケアに対する達成感を抱く】 【患者が病気と共に生きていくことができる礎となる】

この2つのカテゴリーは、上記(3)の看護師の内省が促される際に引き起こされるプロセスである。看護師の患者理解が大きく変化することで、看護ケアが発展し、看護師は【ケアに対する達成感を抱く】。またそれにより、看護ケアが向上し、終局的には【患者が病気と共に生きていくことができる礎となり】、看護師と患者は互いに満足のいく関係となる。この2つのカテゴリーが相互に影響し合うことにより、看護師の看護ケアに対する達成感はさらに高まりを増す。そのことが、上記(3)の看護師の患者理解への深まりや、自己の看護を振り返るプロセスをより強固なものに変化させる。

第5章 考察

本研究は、ドッグセラピーを受けた回復期脳血管疾患患者に関する看護師の認識プロセスを表した。結果、このプロセスは、看護師が患者に貼っていたレッテルが剥がれ、【患者に対する理解ががらりと変わり】【看護ケアに対する達成感を抱く】ことで、【自己の看護を振り返り】、【その人がその人らしく】生きられるよう、患者の本来の姿を引き出せる支援をしたいと信念を抱くようになるプロセスであることが明らかとなった。

このプロセスの終着点である、「患者の本来の姿を引き出せる支援をしたい」と＜看護における信念を抱く＞カテゴリー、【その人がその人らしく】を構成する概念は、各看護師によって異なるが、＜看護における信念を抱く＞までには同様の認識プロセスを経ていた。しかし、回復期脳血管疾患患者に対するドッグセラピーを体験した看護師全員に認識の変化は起こらず、【まるで別人】のように変化する患者に気づくことが、この認識プロセスにおいて、最も重要な認識の転換期であることが明らかとなった。また、認識プロセスの中心のカテゴリーである【患者理解ががらりと変わる】【ケアに対する達成感を抱く】【自己の看護を振り返る】【その人がその人らしく】の相互関係を明らかにできたことは、脳血管疾患患者の回復を促進し、患者を尊重する看護を行う上での示唆を得られたと考える。

そこで上記を踏まえ、ドッグセラピー実施による看護師の気づきと内省の重要性について、続いて、回復期脳血管疾患患者に対するドッグセラピーの有用性と看護への影響について以下に考察する。最後に、これら考察で得られた看護実践への示唆と、研究の限界と課題について述べる。

I. ドッグセラピー実施による看護師の気づきと内省の重要性について

1. 【患者理解ががらりと変わる】【看護ケアに対する達成感を抱く】【自己の看護を振り返る】【その人がその人らしく】の4つの相互作用と看護師の認識

上田,宮崎(2010)は、リフレクションは看護職者自身の内面的変化を複数起こさせ、その変化により、対象者への理解や認識が深まり、対象者の新たな側面を発見し、看護実践を行うことで更に新たな看護の可能性に気づき、その気づきは、自己成長・自己実現、自信

ややりがいへと繋がると述べている。またリフレクションは、自己の看護を省みることで自身の成長を実感したり自己課題を見出すだけではなく、看護を行う上で重要なことに気づいたり、患者の立場に立った看護を考えられるようになる(中本他,2018)。さらに看護実践をリフレクションすることにより、患者にとって最適なケアを促進するための必要な知識や技術の獲得意欲を引き出すことが期待できる(Nicol&Dosser,2016;新井他,2013)。本研究で、回復期脳血管疾患患者がドッグセラピーを受ける場面にいた看護師は、ドッグセラピーにより、看護師自身の気づきや内省が促され、患者理解が深まっただけでなく、最終的には看護における信念を抱くようになり、看護師自身の内面的変化が生じたと考えられる。

患者理解には、看護職者の「理解の阻害」や「葛藤」に気づくことが重要であるが、ドッグセラピーという普段とは異なる関わりにより、看護師は新たな視点で対象者を捉えることができ、複数回の気づきを経て患者理解を深めることができていた。まず一つ目の気づきとして、セラピードッグとの触れ合いにより、【まるで別人】のような一面を見せた患者に気づくことから始まる。この気づきにより、看護師は患者ともう一度向き合うきっかけになったが、この気づきには、「理解の阻害」や「葛藤」である、患者との【関係が行き詰まる】経験を経て、【まるで別人】のような一面を見せた患者に気づくことが、今後の認識プロセスへの移行、つまり看護師の内省において重要となる転換期であったと考える。そのためにも看護師が患者と深く関わりを持ち、患者との関係が行き詰まる中でその感情と深く対峙することが、患者理解と内省に影響を及ぼしていたと考えられる。

また看護師の気づきは一度だけではなく、プロセスの中で何度も引き起こされていた。ドッグセラピーという関係構築の媒介役を頼りに看護師自らが悪循環している関係の解決に挑むが、【関係が軌道に乗り出す】中で看護師は二つ目の気づきを得ていた。この機会では、【病床前の患者の姿を思い描き】、患者の本来の姿に気づくこと、またセラピードッグは【患者にとってかけがえのない存在】であると気づくことである。この二つの気づきを経て、患者に貼っていたレッテルが剥がれ、看護師の【患者理解ががらりと変わり】、患者に対する理解が深まった。またそのことで看護ケアが発展し、【患者が病気と共に生きていくことができる礎となる】までに回復したことで、【看護師はケアに対する達成感を抱き】、看護師と患者は互いに満足 of いくものへと変化した。患者と看護師の関係性が発展したことで、次第に看護師自身に目が向けられ、看護師の内省が促され【自己の看護を振り返る】きっかけとなった。またその内省により、これまでの患者の変化を通じて自

己の看護を振り返ることで、患者の可能性を見出す必要性や、患者のこころの拠り所の重要性に改めて気づく機会となった。このようにドッグセラピーを契機に、看護師は複数回の気づきを経て、患者理解の深まりや内省による内面的変化が生じ、結果として【その人がその人らしく】生きられるよう支援をしていきたいと信念を抱いたと考えられる。

以上、ドッグセラピーが看護師のリフレクションの機会となったが、その機会により看護師の患者に対する理解が深まり、またそのことで、患者との関係を構築することができ、看護の可能性に気づき、最終的には看護実践を行う上で患者を尊重した支援方法を見出す一助になったと考える。

II. 回復期脳血管疾患患者に対するドッグセラピーの有用性と看護への影響

回復期脳血管疾患患者に対するドッグセラピーは、看護師の患者理解の促進、看護ケアの発展、看護師と患者の関係性の構築、患者を尊重したケアという 4 つの点において、看護に有用性があったと考えられる。そこでまず、【患者理解ががらりと変わる】について考察する。次に、【看護ケアに対する達成感を抱く】【自己の看護を振り返る】【その人がその人らしく】の、3つの点について考察を行う。

1. 【患者理解ががらりと変わる】について

回復期脳血管疾患患者は、麻痺や失語などの後遺症により、突然動かなくなった身体に直面するこの時期、自分の身体であるはずが思うように動かず、自分のものであって、自分のものではないような感覚を味わい、患者の孤独と混乱はもっとも大きくなる(山内 典子,2007,第 I,IV章.)。しかし、リハビリテーションは患者の感情とは裏腹に進められ、日常生活動作を拡大する中で、患者は後遺症により、発症前とは同じように身体を動かさない困難さを自覚し、将来への不安が強くなり希望を失う(日坂,柿田, 2021)。そのことで、患者自身の目標であるはずのリハビリテーションの計画が独り歩きし、次第に患者は取り残されてしまう。そのような状況により、患者は他者にこころを閉ざし、無気力や無関心、また怒りの感情を抱くようになったと考えられる。一方、看護師は患者の回復を促すために、患者とコミュニケーションを図ろうと試みたが、反って患者を怒らせ関わりが裏目に出たり、患者と関わりを持とうと働きかけるが反応が見られなかったりと、看護師の患者への抵抗感が強まり、患者との関係が行き詰まった。それでも看護師は患者理解を試みたが、患者の外側から見えている情報だけで患者を理解することは難しく、看護師は自分の解釈で患者を理解しがちになり、そのことでさらに患者との関係が悪循環に陥り、為す術

が無くなったと考えられる。

しかし、セラピードッグとの触れ合いにより、患者がこれまでとは【まるで別人】のように、自らの意思でセラピードッグと触れ合ったり、笑顔を見せたりしたことで、看護師は患者に抱いていた抵抗感が和らぎ、もう一度患者と向き合ってみようと思うことができた。看護師はドッグセラピーを媒介役とし患者との関係構築を試みたことにより、患者はここを開き、他者との交わりを取り戻し、病気と向き合い始める姿が見られた。患者が反応を示したことにより、看護師は患者が意図すること、すなわち患者の経験している世界を共有することができ、患者に思いを馳せるようになったと考えられる。Travelbee(1971/1974)は、患者を理解するためには患者を個人として知る必要があり、そのためには、外側から見えている患者から、私たち看護職者の視点を患者が経験している世界の内側へと移し、その患者の世界を体験することの重要性を説いている。まさしく、ドッグセラピーが契機となり患者との関係が順調に進み出し、患者が心情を吐露し、看護ケアを受け入れるなどの反応を示したことで、看護師の患者を見る視点が、外側からみた患者から、内側から見えている患者の世界に視点を移すことができたと考えられる。そのことで、看護師は患者に思いを馳せ、入院前の患者の姿について考えたり、患者目線でセラピードッグの存在意義を捉えられたりするようになり、看護師の患者に対する固定観念が覆り、患者に貼っていたレッテルが剥がれ、【患者理解ががらりと変わる】に至った。

以上、回復期脳血管疾患患者に対するドッグセラピーは、患者が変化を見せることにより、看護師は患者が経験している世界に視点を移行でき、患者に対する理解を促進することができると考えられる。

2. 【看護ケアに対する達成感を抱く】【自己の看護を振り返る】【その人がその人らしく】について

人は、医療を受ける立場になると価値観が優先されにくく、また自己の意思に沿った判断や決定がされず、意思を持った一人の人として捉えられることが難しくなる(亀井,2017)。そのため、医療者と対象者が対等な立場でいられるよう、対象者を中心に置く、People-Centered Care(市民主導型ケア)や Patient-Centered Care(患者中心ケア)、さらには、Person-Centered Care(人中心ケア)の視点などで関わることが求められている(Eklund et al., 2019;高橋恵子他, 2018)。回復期脳血管疾患患者に対するドッグセラピーにおいて、特に Person-Centered Care(人中心ケア)の実践である、患者がその人らしく生きられるよう、

患者を一人の人として捉え、価値観や好み、入院前の生活を含めて理解すること(大坪,2020)が可能になったと考える。

看護師はドッグセラピーにより患者が変化を見せたことにより、前項 1.の患者が経験している世界に視点を移行でき、看護師が知らない病床前の患者の姿を思い描き、患者目線でセラピードッグの存在意義を捉え、患者理解を深めていった。この患者理解は A 氏の語りの中でも示されているように、「やっぱり自分のこと色々話してくれたりってところでは、まず一つパーソナリティ的なところでは理解できるようになりました。(…省略)それがやっぱり、患者さんがわかった。もーのすごく明るいし、もーのすごくしゃべるし。(…省略)こういう風に思ってたからこうなんだとか、そういう性格だったんだなという(P11L13)。」と、単に脳血管疾患患者という大きな括りで患者を理解するのではなく、対象である患者を、一人の人として理解を深めることができたと考えられる。また看護師は患者を個として捉えられたことで、看護の方向性について選択肢を広げられ、患者とコミュニケーションを図ることで本人の希望を尊重したケアができるようになり、患者に対する看護ケアが発展した。看護ケアが発展したことで、患者は看護師の想像以上に離床が進んだり、障害を乗り越えたり、病気と共に生きていくことができる礎となり、患者はもう一度自分らしく生きることができるようまでに回復した。そのことで、看護師は【看護ケアに対する達成感を抱く】ようになり、看護師と患者は互いに満足のいく関係へと変化し、次第に看護師自身に目が向けられ、【自己の看護を振り返る】こととなった。看護師は内省が促されたことにより、この認識プロセスの終着点である、【その人がその人らしく】生きられるよう支援をしていきたいと信念を抱くようになった。このカテゴリーで生成された概念は、看護師によってそれぞれ異なるが、どれも患者の本来の姿を引き出し、患者を全人的に捉え、患者を個として理解し、患者を尊重したケアを実践するための方策が示されていた。

以上、回復期脳血管疾患患者に対するドッグセラピーは、患者理解を促進し、そのことで看護師は患者を個として捉えられ、看護ケアが発展し、患者と関係を構築することができ、患者を尊重した患者中心ケアを実施するための一助になると考えられる。

III. 看護実践および医療施設におけるドッグセラピー研究への示唆

1. ドッグセラピーが看護師の内省に与える影響

前項 I、II の考察の内容を踏まえ、ドッグセラピーは普段とは異なる関わりにより、看

看護師の内省を促す機会となり、患者を尊重したケアを実施するための一助になると示唆された。

本研究のプロセスでも明らかとなったように、看護師の内省が促されるまでには、看護師の認識は何度も時間的变化を遡り反復していることが分かる。看護師の内省を促すためには、患者の変化について他者と共有する機会を設けたり、一度立ち止まりフィードバックし多角的に患者を捉えたりすることが、看護師の内省を深めるために有効的である。

また内省により得られた、【その人がその人らしく】生きられるよう支援するための方策である概念、[患者の可能性を見出す支援]、[患者の思いが表出できる支援]、[患者の主体性を引き出す支援]を行うことが、患者を全人的に捉え、患者を個の人として理解し、回復期脳血管疾患患者を尊重したケアを実践するために期待される支援方法である。

2. 回復期脳血管疾患患者の関係性構築

ドッグセラピーを受けることに同意した患者に限られるが、回復期脳血管疾患患者との関係構築において、ドッグセラピーは看護師と患者の媒介役となることが示唆された。

回復期脳血管疾患患者は後遺症により、もどかしい思いや怒りなどの負の感情を抱き、リハビリテーションに積極的になれず、ところを閉ざす様子が見られていた。これは、脳血管疾患特有の後遺症が関連していると考えられる。脳卒中発症後のほとんどの患者には、日常生活に支障をきたすほどの倦怠感である、Post Stroke Fatigue(脳卒中後疲労)が出現し、この倦怠感は脳卒中後の抑うつ症状や、リハビリテーションが進まない要因の一つである(Hinkle et al., 2017; Pihlaja et al., 2014; Wu et al., 2015)。またこの抑うつ症状は、障害受容過程にも関連がある。脳血管疾患患者は、発症直後やリハビリテーション開始直後、回復停滞期などの時期において、「落ち込み現象」を体験し、障害と折り合いをつける中で抑うつになる(高山,1997)。加えて麻痺や失語症などの障害により、患者自身が差別や偏見を感じる、セルフスティグマを抱く傾向にあり、その感情もまた患者の抑うつに関連している(Dickson et al., 2008;山田, 2015)。特に失語症患者は、話せないことで他者との交往りが閉ざされ、抑うつ症状により社交性を失うことでさらに負のサイクルに陥り、次第に患者は閉ざされた感覚を味わい孤立していく(Kagan,1995;Northcott & Hilari, 2011)。回復期脳血管疾患患者は、これら後遺症や障害受容過程における心理状況により、負の感情を抱き、リハビリテーションに積極的になれず、他者から孤立することでところを閉ざす様子を見せていたと考えられる。

しかし、このような感情を抱く回復期脳血管疾患患者に対し、看護師は患者と共通の話題であるドッグセラピーを、[患者の負の感情のなだめ役]、[リハビリ意欲の引き立て役]、[感情の引き出し役]として活用することで、患者と意思疎通が図れ、患者を一人の人として理解を深められ、患者との関係構築の発展を期待できる。

3. ドッグセラピー効果研究の基盤

前項 1. 2. で示された看護実践への示唆より、本研究は、国内においては未開拓分野である医療施設におけるドッグセラピー研究の先駆けとなり、今後、医療施設でのドッグセラピー効果を見出す研究基盤になることが期待できる。

IV. 研究の限界と課題

本研究は継続的比較分析の中で、カテゴリーや概念の新規生成には発展せず、小さな理論的飽和化に達したと判断できる。しかし、時間的制約を理由に、データ分析の結果を対象者に確認することができず、また理論の実践的活用には至らなかった。これらのことより、今後データ分析の結果を対象者に確認することや、理論の実践的活用を行うこと、対象者を増やし信頼性を担保することが課題である。

また、本研究では、患者への認識が変化しなかった看護師が存在した。それはなぜなのかを今後明らかにすることで、本研究結果がより明らかになると考える。つまり、患者に対する認識が変化しない場合の看護師の認識プロセスを分析し、認識が変化した看護師のプロセスと比較することで、回復期脳血管疾患患者との関係を構築するための看護実践をより信頼性を高く示すことが出来ると考える。

今回は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により患者を対象とした研究が困難であった。今後、回復期脳血管疾患の当事者に調査を行い、ドッグセラピーによる看護師との関係構築に関する認識プロセス、さらには患者が感じるドッグセラピーの効果を明らかにすることが課題である。

第6章 結論

・本研究は、ドッグセラピーを受けた回復期脳血管疾患患者に関する看護師の認識プロセスを明らかにすることを目的に、回復期脳血管疾患患者のドッグセラピーを経験したことがある看護師を対象にインタビューを行い、M-GTAを用いて分析をした。

・分析の結果このプロセスは、看護師が患者に貼っていたレッテルが剥がれ、【患者に対する理解ががらりと変わり】【看護ケアに対する達成感を抱く】ことで、【自己の看護を振り返り】、【その人がその人らしく】生きられるよう、患者の本来の姿を引き出せる支援をしたいと信念を抱くようになるプロセスであることが明らかとなった。

・このプロセスの終着点である、「患者の本来の姿を引き出せる支援をしたい」と看護における信念を抱くカテゴリー、【その人がその人らしく】を構成する概念は、各看護師によって異なるが、看護における信念を抱くまでには同様の認識プロセスを経ていた。しかし、回復期脳血管疾患患者に対するドッグセラピーを体験した看護師全員に認識の変化は起こらず、【まるで別人】のように変化する患者に気づくことがこの認識プロセスにおいて、最も重要となる転換期であることが明らかとなった。

・以上の結果より、ドッグセラピーは普段とは異なる関わりにより看護師の内省を促す機会となり、患者を尊重したケアを実施するための一助になると示唆された。またドッグセラピー適用患者に限られるが、回復期脳血管疾患患者との関係構築において、ドッグセラピーは看護師と患者の媒介役となることが示唆された。加えて、本研究は、国内においては未開拓分野である医療施設におけるドッグセラピー研究の先駆けとなり、今後、医療施設でのドッグセラピー効果を見出す研究基盤になることが期待できる。

・本研究の課題は、データ分析の結果を対象者に確認することや、理論の実践的活用を行うこと、さらに対象者を増やし信頼性を担保することが必要である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により調査・研究が難しい場面もありましたが、多くの方々のご支援を賜り、ひとつの研究成果として修士論文を執筆することができました。みなさまには心より感謝申し上げます。

聖路加国際大学大学院看護学研究科ニューロサイエンス看護学准教授 大久保暢子先生は、筆者がかねてからの希望である、回復期脳血管疾患患者に対するドッグセラピーと看護を結びつけた研究ができるよう、研究計画の作成から実施、論文執筆まで、多大なるご支援ならびに適切なご指導をして下さいました。

M-GTA の分析手法を開発された聖路加国際大学大学院看護学研究科特任教授 木下康仁先生には、分析が軌道に乗るための道筋を示して下さいました。ご多忙にもかかわらず、幾度も貴重なご指導とご助言を賜り、御礼申し上げます。

聖路加国際大学名誉教授 小島操子先生、ならびに東京通信大学人間福祉学部人間福祉学科教授 佐藤禮子先生は、本研究の価値を見出していただき、筆者が本研究を遂行するきっかけを与えてくださいました。さらに研究を続けていく中で、いつも心温まる激励とご指導をして下さいました。心より感謝申し上げます。

聖路加国際大学大学院看護学研究科准教授 高橋恵子先生と、同大学ニューロサイエンス看護学助教 松石雄二郎先生には、ニューロサイエンス看護学研究会のみならず、ご指導とご助言を賜りありがとうございました。

また、同学年の高柳知美さんをはじめ、ニューロサイエンス看護学研究会の皆様には、筆者の研究内容を自分事のように検討いただくなど、多大なるご支援を賜りました。皆さまの存在が、研究を進めていく上で心の励みとなりました。改めて感謝申し上げます。

加えて、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、大変多忙の中であるにもかかわらず、本研究への協力をご快諾して下さいました病院の看護部長様、師長様、そしてインタビューを引き受けて下さった8名の看護師の方々には、感謝の念に絶えません。

そして最後になりますが、大学院で学ぶことに理解を示し、常にサポートをしてくれた、祖母、父、母、姉、夫には感謝の気持ちでいっぱいです。

皆様のお陰で、筆者がかねてから希望していた研究を形にすることができました。改めて心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

井上 智栄子